

訂改
帝國讀本

卷九

3759
Ha7
資料室

41719

教科書文庫

4
810
41-1918
200030 2056

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文學博士芳賀矢一編

訂改
帝國讀本



東京
合資
會社
富山房發兌



訂改
帝國讀本卷九目次

一	國體の精華……………	一
二	神武天皇と後醍醐天皇……………	七
三	朗詠(韻文)……………	一三
四	羽衣……………	一七
五	舟旅其の一……………	二三
六	舟旅其の二……………	二六
七	千里が竹其の一……………	三三
八	千里が竹其の二……………	三六
九	俳句新調(韻文)……………	四二

目次

一〇	人情と詩美 (口語文).....	四
一一	ワイマールより (書簡文).....	五一
一二	朝潮暮潮 (口語文).....	五七
一三	世界の四聖 其の一.....	六〇
一四	世界の四聖 其の二.....	六九
一五	方丈記 其の一.....	七五
一六	方丈記 其の二.....	八〇
一七	方丈記 其の三.....	八三
一八	菊花の約 其の一.....	九〇
一九	菊花の約 其の二.....	九七
二〇	澄の江の浦 (韻文).....	一〇六
二一	落花の雪.....	一〇九

二三	孤松を愛する日本 (口語文).....	二五
二四	儒の道をわらふ.....	三二
二五	國學.....	四五

・自讀文

一	菅笠日記.....	三三
二	羽衣の傳説.....	三八
三	外人の眼に映じたる富士.....	四三
四	和歌百首 (韻文).....	四五

卷九 目次終

改訂帝國讀本 卷九

一 國體の精華

穂積 八束

我が日本固有の國體と國民道德との基礎は、祖先教に淵源す。祖先教とは祖先崇拜の大義を謂ふ。我が日本民族の固有の體制は血統團體たり。血統團體とは、民族が其の同始祖を敬愛するによりて共存團體を成し、祖先の威力に服従するによりて平和の秩序を維持するを謂ふ。小にしては家を成し、大にしては國を成すものなり。祖先崇拜の大義は、血統團體を構成し、維持するの原由たると同時に、血統團體の存

血統團體

一 國體の精華



軌轍

續は、また祖先崇拜の大義を鞏固にし、深遠にするの効果あり。二者相待ちて消長し、須臾も離るべからず。而して我が固有の國民道德たる忠孝、友和、信愛の道は、一に皆祖先崇拜の大義に淵源し、血統團體を保持するの軌轍たり。我が堅固なる家國の體制は祖先教の基礎の上に立つ。之を千古に維ぎ、之を萬世に傳ふるは我が民族の特質にして、我が國體の精華とする所なり。

人は孤立獨存し得べきものにあらず。共同團結、以て其の生存を全うす。而して其の團結する原由と形體とは固より一ならず。但し利害を以て集散し、約束を以て協和を維持するものは其の團結固からず、又久しからず、利害の異同は生存の狀況に隨ひて時に變轉し、人爲の約束はまた人爲を以

家長權

て解除せらるゝを免れざればなり。血族相依るは自然の團結なり。兒孫が父母の保護の下に團欒するは社會の初にして、民族が同始祖の威靈の下に國を成すは天賦の團結たり。血脈相通ずるは天然の連鎖なり。人爲を以て之を絶つことを得ず。利害の觀念の外に超越し、敬愛の至情に由り、離るべからざるの共同生存を成すものは血統團體なり。血統は之を祖先に受け、之を子孫に傳ふ。故に其の團結は永久なり。血族關係は利害を以て離合斷續するを得ず。故に其の團結は鞏固なり。而して之を統一するものは祖先の威力なり。子孫の祖先の威力に服従するは、對等の約束ならざれば、敬愛の情厚く、忠順の念深し。家に在りては、家長は祖先の威靈を代表し、家族に對して家長權を行ひ、國にありては、

統治權

天皇は天祖の威靈を代表し、國民に對して統治權を行ふ。家長權と統治權とは、共に君父が其の祖先の慈愛する子孫を祖先の威靈に代りて保護する權力なり。

吾人の今日あるは、吾人の祖先が血統團體を建設し、維持し、遺傳したるの餘慶なり。何が故に血統相近きもの相依りて家を成し、民族を成し、又國を成したるか。祖先を崇拜し、其の威力と慈愛との下に、生存の保護を全うせんと欲するの天性の至情に外ならざるなり。汝の父母を敬愛し、其の慈愛なる保護の權力に従順なる至情は、延いてこれを其の父母の父母に及すべし。吾人の祖先の祖先は即ち畏くも我が天祖なり。天祖は國民の始祖にして、皇室は國民の宗家たり。父母拜すべし、況や一家の祖先をや。一家の祖先拜すべし、況や

軌道

一國の始祖をや。家長の位は祖先の靈位にして、皇位は天祖の靈位なり。父母は現世に在る祖先たり。天皇は現世に在る天祖たり。父母に孝なるべき所以は、即ち皇室に忠なるべき所以にして、之を一貫するの國教は即ち祖先の崇拜なり。此の大義は吾人の祖先が國家を成したる基礎にして、吾人が之を永遠に維持するの軌道たるものなり。

絶對の理法

人は信仰によりて動作す。限定せられたる人智は、宇宙の現象を総合して之を其の根柢の眞理に歸結し、絶對の理法を自覺して行動すること能はざればなり。吾人の祖先は肉體の外に不死の靈魂あることを確信し、又子孫を慈愛する父母の威靈は、顯界に於て其の肉體を喪ふも、尙幽界に在りて其の子孫を保護することを確信したり。これ祖先崇拜の

顯界
幽界

吾人は祖先の生命の繼續にして子孫の生命の延長なり

大義の淵源にして、敬神の我が國教たる所以なり。我が固有の國體、民俗、祖先の祭祀を重んずるより重きはなし。家は祖先の威靈の住む處、國は天祖の威靈の住む處にして、祖先の威靈は國家を防護す。吾人は祖先の生命の繼續にして、子孫は吾人の生命の延長なり。祖先の祭祀を不朽に絶たざるは、吾人の肉體に於て代表せらるゝ祖先の生存を永遠に傳へんと欲するなり。祖先と吾人と子孫とが國家の觀念に於て同化し、其の繁榮にして永久なる存在を全うするの大義ここに存す。祖先の靈位を現世に代表する君父に忠孝なるは、祖先に忠孝なるなり。君父が臣子を愛護するは、祖先が其の子孫を愛護するなり。夫婦の和、兄弟の友、民族の共愛、すべて皆我が同祖の祭祀を重んじ、之を永遠に傳へ、祖先の家國の

鞏固にして永久なることを欲する祖先の遺志に適從する道ならざるはなし。我が祖先崇拜の大義は國民の確信に出で、不朽の國體はこれによりて其の基礎を立て、國民の道德は之によりて深厚を加ふ。萬世に亙りて、此の國、此の民を保持するものは、此の國體の精華たる我が固有の祖先教の力なり。

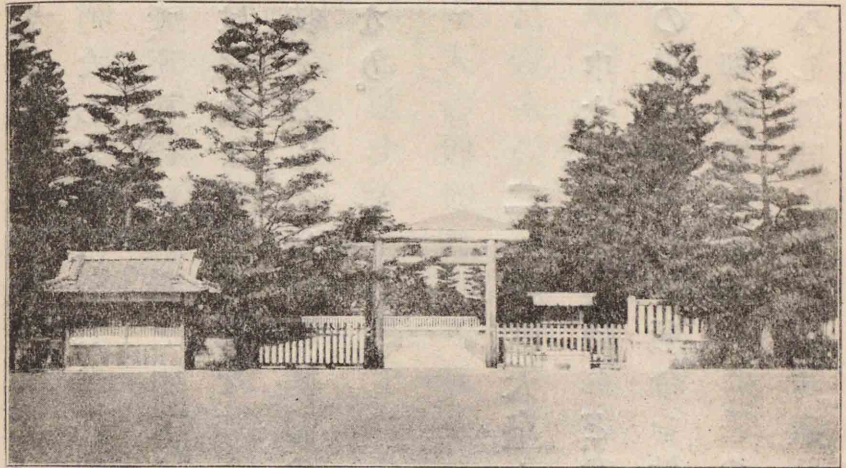
—愛國心—

二 神武天皇と後醍醐天皇 幸 田 露 伴

申すもいと畏けれど、我が邦創業の帝神武天皇、孔舎衛坂の戰に、御兄君五瀨命を敵の矢のために失ひ給ひて、甚だしく御憤懣あらせられ、誓つて長髓彦に天誅を加へんとし給ひし御時は、如何に勇猛壯烈に、大御心の思し給ひしがまゝ

(一)河内國中河内郡。生駒山北麓の登路。

みつくし



欽傍山神武天皇陵

を御歌に述べ給ひしぞや、

みつくししくめの子等が、

粟生には、かみら一本、そね

が本、そねめつなぎて、撃ち

てしやまん。

と歌ひたまひ、又

みつくし來目の子等が、

垣本に、植ゑしはじかみ、く

ちひやく、我は忘れじ、撃ち

てしやまん。

と歌ひ給へる御威勢の烈しき、

御心の猛々しき、葦、薑を食へば

いさぎよし
なんぞ申す
も畏し

餘味こゝに在りて、我が口こゝに疼む。我が兄既に撃たれぬ。我が心尙痛む。忘れんや、忘れんや。おのれ醜虜、撃屠らでは如何で止まん。と、御目に觸れし葦、薑に御情を寄せ給ひて、御言葉のあやをなし出でたまへる、いさぎよしなんぞ申すも畏し御歌なり。

建武中興の帝後醍醐天皇は、これはた申すも畏けれど、英明に渡らせたまひし御門なり。されど其の歌の御こゝる御すがたは、世の異なるが爲もあるべけれど、いたく神武天皇のとはさま異なり。

秋毎のならひと思ひし露時雨

ことしは袖の上にぞありける

と詠じ給へる、

涙はふり落
つ

まだなれぬ板屋の軒のむら時雨
音をきくにも濡るゝ袖かな
とあそばされたる、臣子の分としては、我が日の本の天皇の
かゝる御詠ありしかと思へば、畏ながら御いたはしさに涙
はふり落ち、かゝる御歌を御詠ありたる其の世いと恨めし
く口惜し。

うづもるゝ身をば歎かずなべて世の
くもるぞつらき今朝のはつゆき

の御歌は、大御心の深く廣き、おろかなる身にも大凡はおし
測り奉られて、これまた涙とゞめあへず。

身にかへて思ふとだにも知らせばや
たみのこゝろのをさめがたさを

の御歌は、聖意いとかしこく、恐多ききはみの御詠なり。

物思はで過ぎつるかたの年つきは

如何に寢し夜の

夢にかあるらん

と懷舊の情を詠み給ひたる、

吉野の行宮にていかなる折

にか、

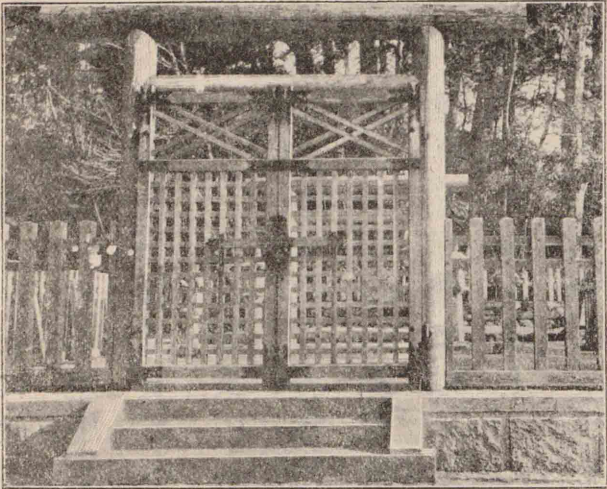
あだに散る花を

おもひの種として

この世にとめぬ

こゝろなりけり

この世にこ
めぬ心



大和吉野後醍醐天皇陵

と感慨したまひたる、同じ行宮にて御風邪めしたる時、

扈從

忘れめや
よるべも浪
のあらいそ

露の身を草のまくらに置きながら
かぜにはよもと頼むはかなさ
と詠じたまへる、御扈從の人々打ちつゞき身まかりける時、
こととはん人さへ稀になりけり
わが世の末のほどぞ知らるゝ
と御心細くものしたまひたる、同じ行宮にて、
ふしわびぬ霜寒き夜の床はあれて
袖にはげしき山おろしのかぜ
と詠じたまへる、船上山にて名和長年に賜ひたる
忘れめやよるべも浪のあらいそを
みふねの上にとめしこゝろは
の御詠の如き、なべて一天萬乗の御歌とし思へば、臣子の分

としては、涙無くしては拜誦しまゐらせ難し。 — 調言 —

三朗 詠

春 興

(一) 唐の詩人。

野草芳菲紅錦地

遊絲繚亂碧羅天

(一) 劉禹錫

もゝしきの大宮人は暇あれや

櫻かざして今日もくらしつ (山部赤人)

春 夜

(二) 唐の詩人。

背燭共憐深夜月

踏花同惜少年春

(二) 白居易

春の夜の闇はあやなし梅の花

色こそ見えね香やはかくるゝ (三) 凡河内躬恒

納 涼

(三) 平安時代の歌
人。古今集撰
者の一。

(一)平安時代の文人。天愛三年(一六〇〇)歿。

(二)平安時代の宮女。中務卿敦慶親王の女。

(三)唐の詩人。

(四)桓武天皇の皇子。

(五)大延二年(一六三四)歿。年九十六。

池冷水無三伏夏

松高風有一聲秋

(源英明)

したくゝる水に秋こそ通ふらし

むすぶ泉の手さへすゞしき

(中務)

郭公

一聲山鳥曙雲外

萬點水螢秋草中

(許渾)

さつきやみおほつかなきを時鳥

なくなる聲のいとゞはるけき

(明日香王子)

秋興

林間煖酒燒紅葉

石上題詩拂綠苔

(白居易)

秋はなほ夕まぐれこそたゞならね

をぎの上風はぎのした露

(藤原義孝)

八月十五夜

三五夜中新月色

二千里外故人心

(白居易)

十二廻中無勝於此夕之好

千萬里外皆爭於吾家之光

(紀長谷雄)

水の面にてる月なみを數ふれば

こよひぞ秋のもなかなりける

(源順)

雪

雪似鷺毛飛散亂

人被鶴顰立徘徊

(白居易)

雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにける

いづれを梅とわきて折らまし

(紀友則)

餞別

前途程遠馳思於雁山之暮雲

後會期遙霑纓於鴻臚之曉淚

(大江朝綱)

(一)平安時代の文人。菅原道真の門人。

(二)平安時代の文人。永觀元年(一〇六四)歿。年七十。

(三)古今集撰者の一人。

(四)儒者又能書に仕ふ。村上天皇

あきかぜには
つきよなるた
そが玉章をか
けて來つらん
友則
山腰歸雁斜
牽虹
未展巾
市
はるがすみ
たつを見す
なゆく雁の
花な
なき里に住
みや
伊勢

(一)儒者。冷泉天皇に仕ふ。

(三)平安時代の文人。

あきかぜふはつもの
つきよなるたそが
玉章をかけて來つらん
友則

山腰歸雁斜牽虹

おもひやる

心ばかりは

さはらじを

なに隔つらん

あきかぜふはつもの
つきよなるたそが
玉章をかけて來つらん
友則

山腰歸雁斜牽虹

嘉辰令月歡無極 萬歲千秋樂未央 (源英明)
長生殿裏春秋富 不老門前日月遲 (慶滋保胤)

祝

きみが代は千代にやちよにさゞれ石の
いはほとなりて苔のむすまで (よみ人知らず)

四羽衣

シテ天人
ワキツレ流夫
(一)風早の三保
の浦曲を漕ぐ
舟の浦人さ
わぐ浪立つら
しも (萬葉
集)
(二)詩人玉屑に
千里好山雲
乍斂。樓明
月雨初晴
時しもや
心空なるけ
しき
(三)忘れずよ清
見が關の浪間
よりかすみ
て見えし三保
の松原 (續
古今集) 中務
卿親王
(三)冷泉爲相の
歌。風向ふ雲
の浮浪立つと

ワキ一聲「風早の三保の浦曲を漕ぐ船の浦人騒ぐ浪路かな。
ワキサシ謠」これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。ワキ
ツレ謠「萬里の好山に、雲忽ちに起り、一樓の明月に、雨初めて晴
れたり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、浪立ち
つづく朝霞、月ものこりの天の原、及びなき身のながめにも、
心空なるけしきかな。歌「忘れぬや、山路をわけてきよ見瀧、
はるかに三保の松原に、たちつれいざや通はん。風向ふ雲の
うき浪たつと見て、釣せで人や歸るらん。待てしばし、春なら

見て、釣せぬ
先に歸る舟
人。

虚空

色香妙にし

ば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝なきに、釣人おほき小舟かな。ワキ詞、われ三保の松原にあがり、浦のけしきをながむる所に、虚空に花ふり、音楽きこえ、靈香四方に薰ず。これたゞごとと思はぬ所に、これなる松に、うつくしき衣かゝれり。よりて見れば、色香妙にして、常の衣にあらず。いかさまとりて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存候。

シテ詞、なう、其の衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。

奇特

ワキ詞、これは拾ひたる衣にて候程に、とりて歸り候よ。シテ詞、それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物にあらず。元の如くにおき給へ。ワキ詞、そも此の衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特にとゞめおき、

さりとは

ごやあらん
かくやあら
ん
せんかたも
なみだ

(一)丹後風土記の
歌。

國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。シテ詞、悲しやな、羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に還らんことも叶ふまじ。さりとは返したび給へ。ワキ詞、此の御詞をきくよりも、いよ／＼白龍力を得、詞もとより此の身は心なき、天の羽衣取隠し、謠叶ふまじとて立ちのけば、シテ謠、今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。ワキ謠、地にまた住めば下界なり、シテ謠、とやあらん、かくやあらんと悲しめど、ワキ謠、白龍衣を返さねば、シテ謠、力及ばず、ワキ謠、せんかたも、地謠、涙の露の玉鬘、かざしの花もしをくと、天人の五衰も、目のまへに見えて、あさましや。

シテ謠、天の原、ふりさけみれば霞立つ、雲路まどひてゆくへしらずも。地謠、すみ馴れし、空にいつしかゆく雲の、うらやま

迦陵頻伽

しきけしきかな、迦陵頻伽のなれし、聲今さらにわづかなる、雁が音の歸りゆく、天路をきけばなつかしや。千鳥、鷗の沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまでなつかしや。

ワキ詞、いかに申候。御姿を見たてまつれば、あまりに御痛はしく候ほどに、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞、あらうれしや。こなたへ賜はり候へ。ワキ詞、しばらく承り及びたる天人の舞樂、たゞ今こゝにて奏し給はゞ、衣を返し申すべし。シテ謠、うれしや、さては天上に還らん事を得たり。此のよるこびにとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。唯今こゝにて奏しつゝ、世のうき人につたふべし。さりながら、衣なくては叶ふまじ。ざりとては先づ返し給へ。ワキ詞、いや、此の衣を返しなば、舞曲をなさで其の儘に、天にやあがり給ふべき。シテ詞、いや、疑は人間にあり。天に偽なきものを。ワキ謠、あらはづかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ謠、少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ謠、天の羽衣風に和し、シテ謠、雨にうるほふ花の袖、ワキ詞、一曲をかんで、シテ謠、舞ふとかや。地謠、東遊の駿河舞、此の時や始なるらん。

疑は人間にあり、天に偽なきものを
霓裳羽衣の曲

「舞ふとかや。地謠、東遊の駿河舞、此の時や始なるらん。」

久かたのあめといつば
伊弉諾、伊弉册の二尊
東西南北乾坤
巽艮上下
玉斧の修理

春霞たなび
きにけり久方の
月の桂も
花や咲くら
ん。後撰集、
紀貫之

「久かたのあめといつば、二神出世のいにしへ、十方世界をさだめしに、空はかぎりも無ければとて、久かたの空とは名附けたり。シテ、サシ謠、然るに、月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、地謠、白衣、黒衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜々のあま少女、奉仕を定め役をなす。シテ謠、我也數ある天少女、地謠、月のかつらの身をわけて、かりに東の駿河舞、世につたへたる曲とかや。クセ、春霞たなびきにけり」

〔一〕僧正遍昭の歌。

たぐひ浪も

玉垣

〔三〕君が代は天の羽衣まれにきて、撫づともつきぬ巖なるらん。〔拾遺集、讀人不知〕

撫づとも盡さぬ巖蘇命路の山

久かたの、月のかつらも花や咲く。げに花かづら色めくは、春のしるしかや。おもしろや天ならで、こゝも妙なり天津風、雲の通ひぢ吹きとぢよ。少女の姿しばしとゞまりて、此の松原の春のいろを三保がさき、月清みがた、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ浪も、松風も、のどかなる浦のありさま。其の上、天地は、何を隔てん玉垣の、内外の神の御すゑにて、月も曇らぬ日の本や。シテ謠〔一〕君が代は、天の羽衣まれにきて、地謠、撫づとも盡さぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへてかずくの、笙、笛、琴、箏、篋、孤雲の外に充滿ちて、落日の紅は、蘇命路の山をうつして、緑は浪に浮島が、はらふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。シテ謠、南無歸命月天子、本地大勢至。地謠「東遊の舞の曲、シテワカ謠、あるひは天つみ空の緑の衣、地、又は春

三五夜中満願真如

〔一〕愛鷹山。

〔二〕承平五年〔一五九五〕二月二十一日、土佐國出發。泊をおふ

立つ霞の衣、シテ、色香も妙なり少女の裳裾。地謠、左右左、さいう颯々の、花をかざしの天の羽袖、靡くもかへすも舞の袖。キリ地謠、東遊のかずくに、其の名も月の宮人は、三五夜中のそらに又、満願真如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土に之を施し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の、あしたか山や富士の高嶺かすかになりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。――觀世流謠曲――

五舟旅 其の一 紀貫之

一別離

〔二〕九日、つとめて、大湊より那波の泊をおはんとて漕出でけ

り。これかれ互に國の境のうちはとて、見送りに來る人あまたがなかに、藤原言實、橘季衡、長谷部行政等なん、御館より出で給ひし日より、此所かしこに追來る。此の人々ぞ志ある人なりける。此の人々のふかき志は、此の海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれて往く。これを見送らんとてぞ、此の人どもは追來ける。かくて漕行くまに、海のほとりに留る人も遠くなりぬ。舟の人も見えなくなりぬ。岸にもいふことあるべし。舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれど、此の歌を獨言にしてやみぬ。

おもひやる心は海を渡れども

ふみしなければ知らずやあるらん

かくて宇多の松原をゆき過ぐ。其の松の數いくそばく、幾

うれ
ごち
べらなり

千年へたりと知らず。本ごとに浪うちよせ、枝ごとに鶴ぞとびかふ。おもしろしと見るにたへずして、ふな人のよめるうた、

見渡せば松のうれごとにすむ鶴は

千世のどちとぞ思ふべらなる

とや。此の歌は所を見るにえ勝らず。

かくあるを見つゝ漕行くまに、山も海もみな暮れ、夜ふけて、西東も見えずして、天氣のこと、櫂取の心にまかせつ。男もならはぬは、いと心細し。まして女はふなぞこに頭をつきあて、音をのみぞ泣く。かく思へば、舟子櫂取はふなうた歌ひて、何とも思へらず。

音を泣く
思へらず

二 海路

十六日、風浪やまねば、猶おなじ所にとまれり。たゞ海に浪なくして、いつしか深崎ふかきといふ所わたらんとのみなん思ふを、風浪ともにやむべくもあらず。ある人の此の浪たつを見てよめる歌、

霜だにも置かぬかたぞといふなれど

浪の中にはゆきぞふりける

さて舟に乗りし日より今日までに、二十日あまり五日になりにけり。

十七日、くもれる雲なくなりて、曉月夜いとおもしろければ、舟を出して過行く。此の間に雲のうへも、海の底も、同じ如くになんありける。うべも昔の男は、

曉月夜

(一) 棹穿波底月、
缸壓水中天。
(賈島)

棹しはうがつ波の上の月を

舟はおそふ海の中の天を

とはいひけん。またある人のよめる、

みなそこの月のうへより漕ぐふねの

さをにさはるは桂なるべし

これを聞きてある人の又よめる、

かげ見ればなみの底なるひさかたの

空こぎわたる我ぞわびしき

かくいふ間に、夜やうやく明行くに、櫂取等、黒き雲にはかに出で來ぬ。風吹きぬべし。御舟かへしてん。といひてかへる。此の間に雨降りぬ。いとわびし。

六舟 旅 其の二

三都 歸

(一)二月十一日。
よこほれる

十一日^(一)雨いさゝか降りてやみぬ。かくてさしのぼるに、東の方に山のよこほれるを見て、人に問へば、八幡の宮といふ。これを聞きて喜びて、人々をがみ奉る。山崎の橋見ゆ。うれしきこと限りなし。こゝに相應寺の邊に、しばし舟をとめて、とかくさだむる事あり。此の寺の岸の邊に柳おほくあり。ある人、此の柳のかげの川の底にうつれるを見てよめる歌、

さゞれ浪よするあやをば青柳の

かげのいとして織るかどぞ見る

十六日、今日の夕つ方、京へのぼる序に見れば、山崎の店を

ごかくさだむる事あり

あるじす

る小櫃の繪も、糰餅の法螺の形も、かはらざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、來る時ぞ人はとかくありける。これにも、それにも、かへりごとす。

(二)世の中は何
か常なる飛鳥
川、昨日の淵
は今日の淵と
なる。(古今
集、讀人不知)

夜になして京には入らんと思へば、急ぎしもせぬ程に、月いでぬ。桂川月の明きにぞ渡る。人々の曰く、此の川飛鳥川にもあらねば、淵瀬更に變らざりけり。といひて、ある人の歌、

ひさかたの月におひたるかつら川
そこなる影もかはらざりけり

又ある人のいへる、

天ぐものはるかなりつるかつら川

そでひつ

そでをひでて渡りぬるかな

又ある人よめる、

かつら川わがころにも通はねど

おなじ深さにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて來れば、所々も見えず。京に入立ちてうれし。家にいたりて門に入るに、月あかければいとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまさりて、いふがひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみて預れるなり。さればたよりごとくに、物も絶えず得させたり。こよひかゝること、聲高にもものもいはせず、いとほしく見ゆれど、志をばせんとす。

志はせん

さて池めいて、くぼまり水づける所あり、ほとりに松もありき。五年六年のうち、千年や過ぎにけん、かた枝はなくなりけり。今生ひたるぞまじれる。大かた皆荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬ事なく思ひ戀しきがうちに、此の家にて生れし女子も、もろともに歸らねば、いかゞはかなしき。舟人も皆子抱きてのゝしる。かゝるうちに猶かなしみに堪へずして、密に心知れる人といへりける歌、

うまれしもかへらぬものを我が宿に

小松のあるを見るが悲しさ

とぞいへる。猶あかずやあらん、又かくなん。

見し人を松のちとせに見ましかば

遠くかなしきわかれせましや

忘れがたく、くちをしきこと多かれど、えつくさず。

—土佐日記—

七 千里が竹 其の一 近松門左衛門

(一)鄭芝龍と其の子鄭成功。

(二)明朝の將軍。後、韃靼に内應して、明帝を弑す。

(三)明朝の忠臣。司馬大將軍。

(四)明の熹宗の年號。(二二八)

船路のすゑも知らぬ火の、筑紫は雲に埋めども、あとに應護の神風や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子の船、唐土の地に着きにけり。鄭芝龍一官は、故郷に歸る唐錦、裝束引きかへ妻子に向ひ、我が本國といひながら、時移り代變り、天下悉く李蹈天が引入れにて、韃靼夷の奴となり、昔の朋友、一族とて、誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂が生死の様子も知れざれば、何を以て義兵の旗を擧げ、何處を一城にたて籠るべき處もなし。然るに、某去んぬる天啓五年、此の國を

(一)錦祥女。

(二)明の將軍。韃靼に降りし、が千ならしめて鄭芝龍に應ぜり。

(三)支那江西省九江府。
(四)支那湖北省武昌府嘉魚縣。
(五)宋の詩人蘇東坡。

立退き、日本へ渡る時二歳になりし娘の子を、乳母の袖に捨置きしが、其の子が母は産落して當座に死す。かくいふ父は、八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今吳將軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となれる由、商人の便に聞及ぶ。頼む方はこればかり。親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、聳の甘輝も安々と頼まるべし。これより道の程百八十里、打連れては人も怪しめん。われ一人道をかへ、和藤内は母を具し、日本の漁船の吹流されしと、頓智を以て人家に憩ひ、おつつくべし。これよりさきは音に聞ゆる千里が竹とて、虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば、潯陽の江、これ猩々の栖む處。風景聳えし高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。そ

たづきも知
らぬ

ほうと我を
ぬかし

れよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。其の赤壁にて待揃へ、萬事を牒し合すべし。」と、方角とてもしら雲の、日影を心おぼえにて、東西へこそ別れけれ。教に任せ和藤内、人家を求め忍ばんと、かひなくしく母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧つ波、とび越え跳越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて廣々たる千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうと我をぬかし、「のう母じや人。此の脛骨に覺えたり。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行けば行く程敷の中、むう、分つたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さは魅せ、宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴。」と、根笹、大竹押分け踏分け、尙奥深く行くさきに、怪しや數萬の人聲、攻鼓、攻太鼓、

喇叭、ちやるめら、高音をそらし、ひようくとこそ聞えけれ。「すは、我々を見咎めて、敵の取巻く攻太鼓か、又は狐のなすわざか。」と、茫然たる其の折節、空凄じく風起り、砂を穿ち、どうどう、竹葉さつと卷立て、卷立て、吹折る竹は、劔の如く、凄じなんどもおろかなり。

讀めたり讀
めたり
(一) 虎嘯山谷風
至。龍舉而景
雲屬。(淮南
子)
(二) 晉の人。十四
歳の少年の時
赤手虎を搏し
て父の厄を救
ふ。

和藤内ちつとも臆せず、讀めたりと、さては異國の虎狩な。あの鐘、太鼓は勢子の者。こゝは聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は、孝行の徳に因つて、自然と逃れし悪虎の難。其の孝行には劣るとも、忠義に勇むわが勇力、唐へ渡つて力はじめ、神力ますく、日本力、双で向ふは大人氣なし、虎はおろか、象でも、鬼でも一挫ぎ。と、尻ひつからげ身繕ひ、母を圍うて立つたるは、西天の獅子

王も、畏れつべうぞ見えてける。

案に違はず吹く風と、共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に

面をすりつけすりつけ、岩角に

爪磨ぎたて、二人を目がけいが

み懸るを事ともせず、弓手に擲

り、馬手に受け、振つて懸れば身

をかはし、撓めばひらりと乗移

り、上になり下になり、命競べ根

競べ、聲を力にえい／＼えい、虎

の怒り毛、怒り聲、山も崩るゝ如

くなり。

和藤内も大童、虎も半分毛を筆られ、両方共に息つかれ、石



近松門左衛門

いがみ懸る

身體髮膚

上に突つたてば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたる其の響、響吹くが如くなり。

母藪蔭より走り出で、やあ／＼、和藤内、神國に生れて神よ

り受けし身體髮膚、畜類に出合ひ、力立して怪我するな。日本

の地は離るゝとも、神はわが身にいすゝ川、大神宮の御祓、納

受などか無からんや。と、肌の護符を渡さるれば、げに尤も。と

押戴き、虎に差向け差上ぐれば、神國神秘の其の不思議、猛り

に猛る威勢も、忽ち尾を伏せ耳を垂れ、じり／＼と四足を

縮め、恐れわな／＼き岩洞に匿れ入る、尾筒を攫んで跳返し、打

伏せ打伏せ、ひるむところを乗つか／＼り、足下にしつかとふ

まへしは、天の斑駒、素蓋鳴尊の神力、天照す神の威徳ぞ有り

がたき。

どじり／＼

風來人

笑壺に入る
ほざく

いつかなこ

八 千里が竹 其の二

かゝる所に勢子の者群り來る其の中に、大將と覺しき者大音舉げ、やあく、うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。其の虎は忝くも、主君右軍將李蹈天より、韃靼王へ献上のため、狩出したる虎なるぞ、早々渡せ。異議に及ば、打殺さん。しやくわん、しやくわん。とわめきけり。李蹈天と聞くよりも、願ふ所と笑壺に入り、やあ、餓鬼も人數、しをらしい事ほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。さほど欲しがる虎ならば、主君と頼む李蹈天とやら、石花菜とやら、こゝへ突出し詫言させい。ちきに逢うて用もある。さもない内はいつかなことならぬ、ならぬ。とねめつくる。やあ、物ないはせそ、打取

れ。と一度に劔をはらりと抜く。心得たり。と護符を虎の首にかけ、母の側に引据うれば、繋ぎし如くに働かず。おゝ心易し。と太刀差翳し、群る中へ割つて入り、八方無盡に割立て割立て、撫でまくる。

勢子の大将安大人、官人引具し立歸り、おのれ老耄餘さじ。と、一文字に切りかゝる。猶も神明擁護の驗、神力虎に加つて、むつくと起きて身慄し、敵にむかひ齒を鳴し、猛りうなりて飛懸る。こはかなはじ。と安大人、勢子の者が差いたる劔、かり鈍、數槍、手にあたるを幸に、投附け投附け打ちかくる。虎は神力自在を得、劔を宙に引つくはへ引つくはへ、岩に打當て微塵になす。刃の光、玉散る霞、氷を碎くに異ならず。打物盡くれば官人ども、色めき立つて迷惑ふ。後より和藤内、どつこい遣

らぬ」と顯れ出で、安大人が素首すくびを搦んで差上げ、くるくると振廻し、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。

仁王立

此の勢に官人ばら、後へ戻れば悪虎の口、先へ行けば和藤内、仁王立に突立つたり。あゝ、申し御堪忍、御免々々」と手を合せ、土に喰ひつき泣きゐたり。和藤内虎の脊を撫で、うぬらが、小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手並覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴、九州平戸に成長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮、梅檀皇女にめぐり逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命惜しくば味方につけ、否といへば虎の餌食、否か、應か」とつめかくる。喃なん、何の否で御座りませう。韃靼王たてんに従ふ

も、李蹈天に従ふも命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情頼み奉る」と、地に鼻つけて畏る。

出かした

「おゝ、出かした、出かした。さりながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん」と、指添の小刀はづさせ、是も當座の早剃刀、母も手々に受取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端そるやら、こぼつやら、絲鬢、厚鬢、剃刀次第、瞬く隙に剃りしまひ、二櫛半のはらけ髪、頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合せて、頭冷つく風引いて、噓々、村雨々々」と、涙を流すぞ道理なる。親子どつと打笑ひ、揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて何左衛門、何兵衛、太郎、次郎、十郎まで、面々が國所頭字に名乗り、二行に立つてぼつたてる。「承り候」と、お先手の手振の衆、ちやぐ

はらけ髪

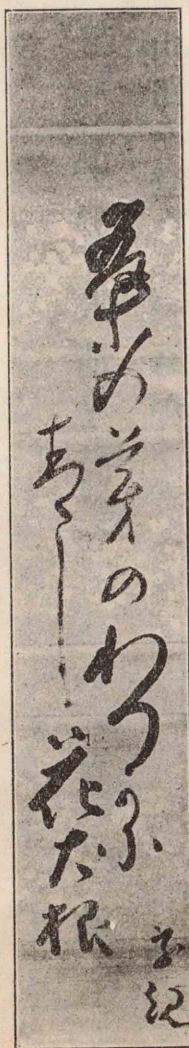
ちう左衛門、東蒲塞右衛門、呂宋兵衛、東京兵衛、暹羅太郎、白城次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉九郎、もうる左衛門、ぢやが太郎兵衛、さんとめ八郎、英吉利兵衛、今參のお供先、跡に引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の、名を取る、口取る、國を取る、譽は異國、本朝に、踏跨げたる鞍、鑽、虎の脊中に打乗つて、威勢を千里に顯せり。
— 國姓爺合戦 —

九 俳句新調

、明天子上に在る野の長閑なる
、春淺き水を渉るや鷺一つ
、春雨や傘高低にわたし舟
流れ木やだぶりくと春の川
漱石
碧梧桐
子規
鳴雪

海苔の香の紫さめて春暮れぬ
西瓜太郎躍り出でよと割りてけり
口あいて佐渡が見ゆると涼みけり
てらくと百日紅の日照かな
不迷
瓊音
紅葉
子規

桑の芽のわづかに青し花大根 子規



子規筆蹟

砲車過ぐる巷の塵や日の盛
短夜や灯を消しにくる宿の者
○
語草既に盡きぬる夜長かな
澁柿は澁にとられて秋寒し
碧梧桐
虚子
四方太
子規

年々に天長節の日和かな	鳴雪
秋の川眞白な石を拾ひけり	漱石
初冬の竹みどりなり詩仙堂	鳴雪
乞食の門去りあへず柳散る	紅葉
臍をちゝめ肝をちゝめて寒さかな	東洋城

一〇 人情と詩美

夏目漱石

山路を登りながら考へた。

智に動けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると心安い處へ引越したくなる。何處へ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れ、畫が出来る。

越すことのならぬ世が住みにくいければ、住みにくい處をどれ程か寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出来、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に貴い。

住みにくい世から住みにくい煩を引抜いて、有難い世界をまのあたりに寫すのが詩である。畫である。或は音樂、彫刻である。細かにいへば、寫さないでもたゞまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起り、丹青を畫架に向つて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら眼に映る。たゞおのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清く麗に収め得れば

鏗鏘の音

足りる。此の故に無聲の詩人には一句無く、無色の畫家には尺縑無くとも、かく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脫し得る點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得る點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

忽ち足下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、何處で鳴いてゐるか影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明らかに聞える。せつせとせはしなく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されてゐたたまらない様な氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕も無い。長閑な春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、又鳴きくらさなければ氣が濟まぬと見える。其の上何處までも登つて行く。いつまでも登つて行く。雲雀はきつ

と雲の上で死ぬに相違ない。登り詰めた擧句は、流れて雲に入つて漂うて居る中に、形は消えて無くなつて、たゞ聲だけが空の裡に残るのかも知れない。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘る、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體が無くなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に眼がさめる。雲雀の聲を聞いた時に魂の在所が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのでは無い、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものの中で、あれ程元氣のあるものは無い。あゝ愉快だ。かう思つてかう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレ^(一)の詩を思出して、口の内^(二)で覺えた所だけ誦して見たが、覺えてゐる所は二三句しか無かつた。

(一) Percy
Bysshe Shelley.
英國の詩人。
(西曆一七九二—一八二二)
(二) 雲雀に寄する賦。
(Ode to the Skylark)

「前を見ては、後へを見ては、物欲しと憧るゝな。われ腹からの笑といへど、苦みはそこにあるべし。美しき極みの歌に、悲しさの極みの相籠るとぞ知る。」

なる程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思切つて、前後を忘却して、一心不亂に我が喜を歌ふわけには行かぬ。

萬斛の愁

西洋の詩は無論のこと、支那の詩にもよく萬斛の愁などといふ辭がある。詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く積になれば、微塵の苦も無い。菜の花を見てもただ嬉しくて胸が躍るばかりだ。かく山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦みも起らぬ。

醇乎として

苦みの無いのは何故であらう。たゞ此の景物を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道を架けて一儲する料簡も起らぬ。たゞ此の腹の足しにもならぬ景色が、景色としてのみ余が心を樂しませるから、苦勞も心配も伴はぬのであらう。自然の力はこゝに於てか尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩興に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、泣いたりするのは、人の世のつき者だ。余の欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞する様なものでは無い。俗念を放棄して、少時でも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居は無い。

理非を絶した小説は少からう。何處までも世間を出ることの出来ぬのが其の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、いはゆる詩歌の純粹なものも此の境を解脱することを知らぬ。嬉しいことに、東洋の詩歌にはそこを解脱したものがあつた。

採菊東籬下。悠然見南山。

たゞこれぎりのうちに、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出て来る。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持に爲れる。

獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。

深林人不知。明月來相照。

たゞ二十字の中に優に別乾坤を建立してゐるのである。

草枕

一 一 ワイマールより 藤代 禎 輔

(1) Weimar. 獨逸ワイマール大公國の首都。

(2) Ilm. (三) 東京市の北郊王子町にある細流。

ワイマールは小さな都にて、山水の景勝に富めるにもこれ無く候へども、如何にも閑靜にて人氣良く、誠に居心地よき所に候。公園には森の繁れる中を、イルムといふ瀧の川位の流ちよろしく、致居、其の上には鐵の欄干に石柱といふ厳しき橋も有れど、又丸太を組合せて架けたる風流なる橋もありて、シルレルの腰掛とか、ゲーテの休息小屋とか、何れも昔通り保存せられて、古を偲ぶ跡到る處に散在致居候。一委しく點檢して詩作との關係など取調べ候はゞ、餘程興味ある事ならんが、短日月の滞在にては夫も出来兼候まゝ、

通り一廻の旅客として、目に觸れ候處を御報申上候。

今日第一番に足を運びたるは圖書館に候。此の圖書館は、初めはゲーテが我が書齋にとて自ら設計したる建築の由。



像 テーゲ

(藏館書圖ルーマイワ作ルベツリト)

珍書奇籍も夥しく、ゲーテ、シルレルを始め有名なる人物の彫像、肖像畫など、貴重品の數々ありて、今まで文學史の挿畫にて纔かに其の倂を偲び居たる名作の實物に接し、トリツペルが靈腕に彫ま

Alexander
Trippel. 獨
流著名の彫
家(西曆一七
四一—一七九
三)
Apollo. 希
臘羅馬の神
話中重要なる
神の名。
Johann
Heinrich von
Danneker. 獨
逸著名の彫
刻家(西曆一
七五八—一八
四一)

れたるアポロ其の儘との評あるゲーテが大理石像、ダンネツケルが妙技を揮ひしシルレルの半身像など、凝然見惚れ
て案内者に急きたてられ、不承々々歩を移すといふ始末、儘
になるなら何時までも此處に居て、朝夕此等の逸品を眺め
たしとの念も起り候。圖書館を出でてシルレルの住宅を音
づれ候。表よりの見附きはさ
して立派といふ建物にはこ
れ無く候へども、窓の板戸が
綠色に塗立てある様など、何
と無くゆかしき心地せられ
候。中に入りて一階二階は梯
子段を見しばかり、三階に至りて應接室、書齋、臨終室を一覽
致候。一切の裝飾品を取除けて、詩聖が使ひ慣れし文房具、椅
子、寢臺、掛額等を据附けあるばかりなれば、至つて質素に候

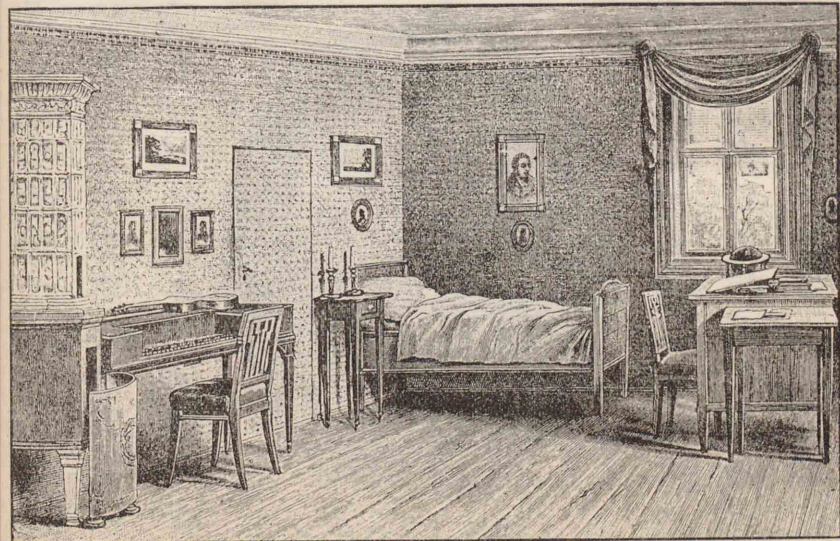


像胸ルレルシ

(藏館書圖ルーマイワ作ルケツネンダ)

神來の筆

へども、此の内に起臥して晩年の傑作を産出し、現場かと思へば、感慨限り無く、腐れ林檎の香を嗅ぎて深更まで意匠を凝したるは此の机の前にやあらん、嗅煙草に睡魔を驅りて、神來の筆を馳せたるは彼の窓の下ならんなど、詩人ならぬ我が身も空想の天地に馳往きて、案内者の饒舌も耳に入らず候。臨終室を見るに及びて其の餘りに狭

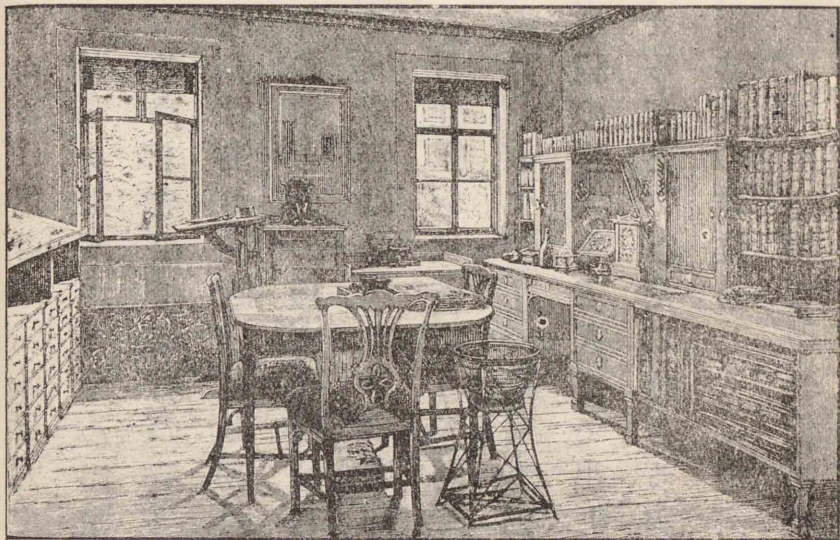


シ ル ル の 書 齋

隘なるに驚き、かゝる偉人が此のむさくろしき部屋にて息を引取りたるかと、坐ろに暗涙に咽び候。

此處を立出で、國君の墳墓に詣で候。これはワイマール代の君主が遺骸を納むる圓天井の石室にて、ゲート、シルレルの棺も此の裡に安置せられ、木棺の上部は月桂樹の葉にて堆く蔽はれ、ゲートの頭部には金製、シルレルのには銀製の月桂冠を供へあり候。兩詩人の優劣は存命中よりとかく議論ありて、ゲート自身も、強ひて一人に團扇を上げずとも、是程の詩人を二人まで出したりと獨逸國民は喜ぶべき筈なるを、といひたる位なるが、今此の金銀の差別を見て、勿論兩詩人の地位若しくは逝去當時の事情に依るとはいへ、シルレルは死後まで薄倅なりきとの感を起し候。併し身を布

時めく



衣に起して、王者と共に同一石室に葬らるゝは比類無き名譽とも申すべきか。感歎の餘り、兩詩聖の棺の上なる月桂樹の葉數葉を摘取り、記念にとて持歸り候。

テの住宅に
 の 赴きしが、さすが宰相の地位
 の 齋 ありて當代に時めきし詩
 人の事とて、シルレルの居宅
 などとは比較にならぬ程廣
 大なるものなれど、現今の程

Jena.
 獨逸サクセ
 ワイマルの
 首都。
 Wurzburg.
 獨逸バイッ
 ヤ王國の都
 府。

度よりいへば、極めて質樸にて、是亦案外の感に打たれ候。ゲ
 ーテの寢室に入りて、シルレルが臨終の際、ゲーテも病尊に
 就き居りしかば、家人はシルレルの死を告げなば、病氣に障
 りなんとて秘しけれど、素振りに覺りて其の實を察し、潸然
 流涕したりとの一事を思ひ浮ぶれば、兩詩聖の交情は東西
 古今に例無く美しきものなりけりと感涙禁め難く候ひき。
 ワイマル見物も二通り相濟みたれば、明日此の地を發
 足致し、^(一)イエナを経てウルツブルグに赴くつもり、行く先々
 の模様は追々御通知申上ぐべく候。 — 帝國文學 —

一一 朝潮暮潮

幸 田 露 伴

同一の江海である。しかも朝は朝の光景を現し、暮は暮の

光景を現す。

曉の水烟が薄青く流れて、東の天が漸くに明るくなると、やがて半空の雲が焼け初めて、又紅に、又紫に美しく輝く。其の時一道の金光が漫々と涯り無き浪路の盡頭から、閃くが如く、迸るが如く、火箭の天を射るが如くに發する。忽ちにして其の金光の一道は、二道となり、三道となり、四道、五道となり、奕々灼々として火龍舞ひ、朱蛇驚き、萬斛の黄金の洪爐を溢れて、光燄熾盛、烈々煌々たる炎を揚ぐるが如くなる、と見る間も無く、紅玉熔け爛れんとする大日輪が、滄波の間から輾り出す。混沌が忽ち拆けて天地は遽に開け、魑魅は遁竄して翔走皆欣ぶ勢が現れるところの、いはゆる水門みなと開あひらの有様を示す。さうすると岸うつ波の音も濱に寄する貝の色も、

奕々

黙してゐる磯の巖の顔も、死せるが如き藻鹽木の香も、皆盡く歡喜の美酒に酔ひ、吉慶の頌歌を唱へて、愉々快々たる空氣に嘯くやうな相を現すのである。朝の江海の状は實にかくの如くである。

其の同じ江海でも、若し日の既に虞淵に没して後、西天の紅霞漸く色を失ひて、四邊蒼茫將に夜に入らうとする時になると、刻一刻に加りまさる黯淡たる雲の幕の幾重に、大空の嘉光は蒞み蔽はれて、陰鬱の氣は瀾一瀾に乗つて流れ來り、霧愁ひ、風悲しんで、水と天とは憂苦に疲れ萎えた體の自ら支ふる能はざる如くに、互に力無き身を寄せあひ、絡ませあつて、終に死の闇の中に消えて終ふが如き觀を呈する。其の時の有様は、實にあはれなものである。

江や、海や、本來は無心である。其の朝に於けるも、其の暮に於けるも、全く異ならぬのである。しかも同一の江海と雖も、其の朝に於けるや彼の如く、其の暮に於ける此の如くである。同一の物と雖も、常に同一ではあり得ぬのである。

努力論

一三 世界の四聖 其の一

高山林次郎

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人にあらずんば、誰かこれを能くせんや。釋迦、孔子、ソクラテス、基督の四人、世呼んで世界の四聖とたゞふるは、宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家

一代の宗師
百世の儀表

成道

正覺

巡錫

元々

に生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人、其の本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潜め、二十九の歳、其の妻子を捨て、王城を逃れ、山林に隠れて、道を修むること六年、終に人生の奧義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、中天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒らに思索の高遠を歛びて、人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて安心の道を求めたり。其の流派を樹て、相争ふ所は畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元々をして、

歸命の大道
木鐸

歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦此の間に生れ、其の浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。

老軀を挺す

孔子、名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去ること二千四百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり。學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司空の職に就く。治績大いに舉り、内外其の風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて、四方の遊説を試みぬ。

當時の支那は所謂春秋戰國の亂世なり。周の王室は名の

蕩然として
地を拂ふ

教化の陵夷

狂瀾を既倒
に廻さんとす

老脚蹉跎

下學して而
して上達す

みにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にして其の君を弑する者あり、或は子にして其の親を害する者あり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾て此の時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻さんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくのごとくにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世又耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知るものなきか。」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知るもの無からんや。孔子答へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。」

吾を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。と。後幾ばくもなくして歿す。時に年七十三。

ソクラテースは希臘の雅典府に住める一彫刻師の子なり。其の生れたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年を隔つる事二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりといふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に止り、道德は空文の上のみ貴ばれたり。其の狀猶釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して、殆ど裨益する所無かりき。ソクラテースは慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭

詭辯學派

侃諤

喬木は風に折らる

辯學者の輩に遇へば、則ち其の獨得の論法を以て辯難攻撃して一步も假借せず。侃諤の正義、其の稀代の雄辯と相伴なひて一世を風靡せり。

然るに「喬木は風に折らる」といふ喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざるもの相計りて、國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。其の訴狀に曰く、「ソクラテースは國教を信ぜずして異教を勸め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテースが此の讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるは無し。然れども判官はソクラテースを以て傲慢不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚

かず、曰く、命のみ」と。

ソクラテースの獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死、
靈魂、未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、輒
ち答へて曰く、予は唯正義に導かれんのみ。死又何爲るもの
ぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや」と。終に從容と
して毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子、遺言を求む。
ソクラテース曰く、爾一鷄を以てアスクレピアスの神に捧
げよ」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘
れしが爲ならん。希臘の聖人ソクラテースはかくの如くに
して逝きぬ。年七十。

Asklepias.
希臘の醫藥の
神。

基督は本名を耶蘇といふ。基督とは「膏灌がれたる者」とい
ふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。猶太のベトレヘムに生

Johannes.

る。西曆紀元第一年は其の生後四年目に當れり。父はヨセフ
と呼べり。賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて
三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、初めて傳道の生
涯に入り、爾來三年の間、猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈
せずして其の福音を傳へたり。

胚胎す

抑、當時は羅馬帝國の榮華、正に其の極に達し、禍亂の萌芽
其の中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日無し。殊に基督
の故國なる猶太は、久しく暴君の収斂に疲れ、異邦人の侮慢
を被れり。民衆は徒らに珍奇の淫祠を崇拜して、益、放縱の俗
に流れ、學者は詭辯を弄し、形式に拘泥して、空しく人を惑は
すのみ。是に於て、一世の人心は悉く偉人の現出して此の暗
黒の社會を照破せんことを渴望せり。基督此の間に生れ、自

放縱の俗

救世の使命

ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然其の偉大なる新教理を宣傳するや、遠近靡然として之に赴く。僧侶、學者、官吏等は之を喜ばず、以て猥りに新法異説を唱へて民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫め此の事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜に祈りて曰く、「神よ、かれ等を宥せ。かれ等は其の爲すべき所を知らざればなり。」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧て曰く、「エルサレムの女子よ、吾が爲に哭くこと勿れ。唯おのれとおのれの子との爲に哭け。」とかくの如くして基督は三十三年の短命を以て十字架上の露と消去りぬ。基督の死後、其の弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、其の教を天下に弘む。基督教即ち是なり。

Jerusalem.

一四 世界の四聖 其の二

轆軻不遇

以上は四聖の略傳なり。其の人物、事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。四聖の内釋迦を除きては何れも轆軻不遇の中に其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて空しく咏歎の間に歿せり。ソクラテースと基督とは何れも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。慘憺たりと謂ふべし。然れども是等の人々の志す所は天下後世に在り、現世の禍福と一身の安危とは毫も其の顧慮する所にあらず。故に其の死に就くや、晏如として猶歸するが如し。孔子は其の一身の不幸を憂へずして、却つて「吾が道行はれ

浩大無邊

ずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と嗟歎せり。釋迦は衆生の爲に其の妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く、正義を信ずるものにとりて、死はた何爲るものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、其の一日即ち國民の迷をさまさざるべからず。」と。基督は己を罪に陥るゝものの爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞ其の慈悲の浩大にして無邊なるや。

涅槃

四聖は其の生れたる處と時とを異にす。故に其の教理にも亦多少の差違無きを得ず。今其の要畧を擧ぐれば左の如し。

我

後天

釋迦の教理は煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始りて苦に終る。生老病死、孰か苦に非ざるべき。故に吾人は現在を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾に在り、情慾の原因は「我」の一念に執着するに在り。故に吾人は「我」の一念を脱却して、無我無念の境界に達せざるべからず。是人生究竟の樂地にして、涅槃即ち是なり。孔子の教は身を修め、家を齊へ、天下を治むるに在り。而して身を修むる基は孝に在り。故に孝は百行の本なり。君臣の義父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生れながらにして、美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて之を完うすること能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育を受けて身既に修らば、家おのづから齊ふべく、家齊は、國おのづから治るべく、國治らば、天下おのづから太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養

知徳合一

に始り、治國平天下に終るものと見るを得べし。
ソクラテースの教は所謂知徳合一説なり。思へらく、眞正の知識は即ち道徳なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識道徳の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、其の實行を以て最上の義務となせば、正義おのづから其の中に在り。正義は靈魂の満足なり。而して靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道徳は富貴の爲に存せず。然れども富貴は道徳の中に在り」と。

垂訓

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は、三年傳道の極意を包括するを以て、左に其の大略を擧げん。曰く、心の貧しきものは福なるかな、天國は其の人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、其の人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな、其の人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、其の人は憐を得べければなり。心の清きものは福なるかな、其の人は神を見るべければなり。惡に敵すること勿れ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉らして之に向けよ。汝の隣人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。人に見せんが爲に義を其の前行ふこと勿れ。右の手に爲す所を左の手に知らしむること勿れ。偽善者の行に倣ふこと勿れ。隠れたるを鑑み給ふ神は、顯に報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非すること勿れ。人の目にある塵を見なが

何ぞ己が目
にある梁木
を見ざる

ら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る路は濶く、其の門は大きく、之より入るものは多し。嗚呼、いかに生命に至る路は窄く、其の門は小さく、之を得るものの少きぞや。凡そ此の訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざる者は、沙上に屋を架せる愚人の如し。と。基督教の精髓は、後世の人如何なる色彩を加ふとも、畢竟此の山上の垂訓を出でず。

かくの如きは四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而して此の教の今なほ凜々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、此の教に憑りて其の道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠の救濟者なりと謂ふべし。其の遺徳の高大なることを何

—— 樗牛全集

一五 方丈記 其の一

鴨 長 明

一 うたかた

うたかた
棟をならべ
薨を争ふ

ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつむすびて、久しく止ることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。玉敷の都の中に棟をならべ薨を争へる、高き卑しき人のすまひは、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所

無常を争ひ去る

もかはらず人も多かれど、いにしへ見し人は二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死し夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

知らず、生れ死ぬる人、いづ方より來りていづ方へか去る。又知らず、かりのやどり誰が爲に心をなやまし、何によりてか目をよるこぼしむる。其の主人と住家と無常を争ひ去る。さま、いはゞ朝顔の露に異ならず、あるは露落ちて花残り。残るといへども、朝日に枯れぬ。あるは花しほみて露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つことなし。

およそものの心を知れりしよりこのかた、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、やゝたびくゝになりぬ。

(一)高倉天皇の御代。(一八三七)

とかく

去にし安元三年四月二十八日かとよ、風はげしく吹きて、静ならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で來て、いぬるに至る。はてには朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省まで移りて、一夜がほどに塵灰となりにき。火もとは樋口富の小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けるとなん。吹迷ふ風にとかく移りゆくほどに、扇をひろげたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたりはひたすら焰を地に吹きつけたり。空には灰を吹立てたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず、吹切られたる焰飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ、うつり行く。其の中の人、現心あらんや。或は煙にむせびて仆れ伏し、或は焰にまぐれて忽ちに死にぬ。あるは又纔かに身ひとつからくして遁れたれど

現心

公卿

あぢきなし

○(一)高倉天皇の御代。(一八四)

も、資財を取出づるに及ばず。七珍萬寶さながら灰燼となり
にき。其の費いくばくぞ。此度公卿の家十六焼けたり。まして
其の外は數を知らず。すべて都の中、三分一に及べりとぞ。男
女死ぬる者數千人、馬牛の類邊際を知らず。人のいとなみ皆
おろかなる中に、さしも危き京中の家を作るとて、寶を費し
心を悩ます事は、すぐれてあぢきなくぞ待るべき。
また治承四年卯月二十九日の頃、中の御門、京極のほどよ
り大きなる辻風起りて、六條わたりまで、いかめしく吹きけ
ること侍りき。三四町をかけて吹きまくる間に、其の中に籠
れる家ども、大きなるも、小さなるも、一つとして破れざるはな
し。さながら平に倒れたるもあり。桁柱ばかり残れるもあり。
また門の上を吹放ちて、四五町が外に置き、また垣を吹拂ひ

業風

○(一)安徳天皇の御代。(一八四)

て隣と一つになせり。況や家の内のたから數をつくして空
にあがり、檜皮ぶき、板類、冬の木葉の風に亂るゝが如し。塵
を煙の如く吹立てたれば、すべて目も見えず。おびたゞしく
鳴りどよむ音に、ものいふ聲も聞えず。かの地獄の業風なり
とも、かくこそはとぞおぼえける。

また養和の頃かとよ、久しくなりてたしかに覺えず、二年
が間飢渴してあさましき事侍りき。あるは春夏日であり、ある
は秋冬大風大水など、よからぬことども打續きて、五穀こと
ごとくみのらず、空しく春耕し、夏植うるいとなみのみあり
て、秋刈り冬収むるぞめきはなし。

これによりて國々の民、あるは地を捨て、境を出で、ある
は家を忘れて山に住む。さまざまの御祈はじまりて、なべて

なべてならぬ

さのみやは
みさをもつ
くりあへん

ならぬ法ども行はるれども、更に其の効なし。
京のならひ、何わざにつけても、源は田舎をこそたのめる
に、絶えてのぼる者なければ、さのみやは、みさをもつくりあ
へん。念じわびつゝ、さまゝの寶物かたはしより捨つるが
如くすれども、更に目見たつる人もなし。たまゝかふるも
のは金を軽くし、粟を重くす。乞食道のべに多く、憂へ悲しむ
聲耳に満てり。さきの年かくの如く、からくして暮れぬ。あく
る年は立直るべきかと思ふに、あまさへ疫病うちそひて、ま
さるやうに跡かたなし。

あまさへ

一六 方丈記 其の二

二 わづらひ

ありにくき
こと

すべて世のありにくきこと、わが身と棲家とのほかなく
あだなるさまかくの如し。況や所により身のほどに隨ひて、
心をなやますこと、あげて數ふべからず。

すほき

もしおのづから身數ならずして、權門の傍にをる者は、深
く悦ぶ事はあれども、大いに樂しぶに能はず。歎ある時も、聲
をあげて泣くことなし。進退安からず、立居につけて恐れ戦
く。例へば雀の鷹の巢に近づけるが如し。もし貧しくして富
める家の隣に居るものは、朝夕すほき姿を耻ぢて、諛ひつゝ
出で入る。妻子僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家の人
のなかがしろなる氣色を聞くにも、心念々に動きて、時とし
て安からず。もし狭き地に居れば、近く炎上する時、其の害を
遁るゝことなし。もし邊地にあれば、往反煩多く、盜賊の難離

念々に動き
て

たまゆらも

たづきなし

(一)住みわびて
我さへ軒の忍
ぶ草、しのぶ
かたがたしげ
き宿かな。金
葉集、周防内
侍

れがたし勢あるものは貪慾深く、ひとり身なるものは人に
輕しめらる。寶あればおそれ多く、貧しければなげき切なり。
人をたのめば身他の奴となり、人をはごくめば心恩愛につ
かはる。世に従へば身くるし。又従はねば狂へるに似たり。い
づれの所をしめ、いかなるわざをしてか、しばしも此の身を
やどし、たまゆらも心をなぐさむべき。

わが身父方の祖母の家を傳へて、久しくかの所に住む。そ
の後縁かけ身衰へて、忍ぶ方々しげかりしかば、遂に跡とむ
る事を得ずして、三十餘みそぢあがりにして、更に我が心と一つの庵を結
ぶ。これをありしすまひになずらふるに、十分が一なり。たゞ
居屋ばかりを構へて、はかしくは屋を造るに及ばず。僅
かに築地をつけりといへども、門たつるにたづきなし。竹を

よすが

柱として、車宿りとせり。雪降り、風吹く毎に危からずしもあ
らず。所は河原近ければ、水の難深く、白波のおそれも騒がし。
すべてあらぬ世を念じ過しつゝ、心をなやませることは、
三十餘年なり。其の間折々のたがひめに、おのづから短き運
をさとりぬ。すなはち五十の春を迎へて家を出で、世をそむ
けり。もとより妻子なければ捨てがたきよすがもなし。身に
官祿あらず、何につけてか執をとゞめん。空しく大原山の雲
にいくそばくの春秋をか經ぬる。

一七 方丈記 其の三

三 閑居

こゝに六十の露消えがたに及びて、さらに末葉のやどり

(一)亦宿行人之造。旅宿老意之成。獨爾乎。其住幾時。(慶滋保胤、池亭記)

を結べることあり。いはゞ、旅人(一)の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭をいとなむが如し。これを中頃のすみかにならずらふれば、また百分が一にだも及ばず。とかくいふほどに、齡は年々にかたぶき、住家は折々にせまし。其の家のありさま世の常にも似ず。廣さはわづかに方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛がねをかけたなり。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さんが爲なり。其の改め造る時幾ばくの煩かある。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、さらに他の用途いらず。

(二)山城國宇治郡。木幡山の東北。

閑伽棚

いま日野山の奥に迹をかくして後、南にかりの日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、其の西に閑伽棚を作り、うち

眉間の光
普賢

(一)六卷。源信僧部の著。

つかなみ

には西の垣に沿へて、阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢ならびに不動の像を掛けたり。北の障子の上にちひさき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌、管絃、往生要集(一)ごときの抄物を入れたり。かたはらに箏、琵琶おののく、一張を立つ。いはゆる折箏、つき琵琶これなり。東に沿へて蕨のほどもを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。ひがしの垣に窓を開けて、こゝに文机をいませり。枕のかたにすびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占めて、あばらなる姫垣をかこひて園とす。すなはちもろくの薬草を植ゑたり。假の庵のありさまかくのごとし。

其の處のさまをいはゞ、南に筧あり、岩をたゝみて水を溜

紫雲

(一)世の中を何にたとへん朝ぼらけのあとゆく船のあとのしら波。
 (二)拾遺集。沙彌滿誓。山城國紀伊郡。宇治川の東岸。宇治川の(三)沙彌滿誓。元正天皇の時の人。

罪障

めたり。林軒ちかければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら迹を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり。觀念のたより無きにしもあらず。春は藤浪を見る。紫雲の如くにして西の方にほふ。夏は子規を聞く。かたらふごとくに死出の山路をちぎる。秋は日ぐらしの聲耳に満てり。空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む。つもり消ゆるさま罪障に喩へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また耻づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業ををさめつべし。かならず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ何に就けてか破らん。もし迹のしら浪に身を寄するあしたには、岡の屋に行きかふ船をながめて、^(一)滿沙

(一)潯陽江頭夜送客。楓葉荻花秋瑟瑟。^(二)琵琶行。琵琶。桂大納言源經信。琵琶の名。嘉保元年。手。七五四。宰相權帥に貶せらる。都督は唐風。太宰帥を唐風に呼ぶ稱。名曲。^(三)共に琵琶の名曲。

あからさま

やんごとなき人

彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならず夕には、潯陽の江をおもひやりて、源都督のながれをならふ。若しあまりの興あれば、しばし松のひゞきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳をよるこばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。
 大かた此の處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今已に五とせを経たり。假の庵も稍ふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事の便に都の様を聞けば、此の山に籠り居て後、やんごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。まして其の數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。度々の炎上に亡びたる家又いくそばく

がうな

ぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。
 程せばしといへども夜臥す床あり、晝居る座あり。一身を
 やどすに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を
 知るによりてなり。みさごは荒磯に居る。すなはち人を恐る
 るが故なり。われまたかくの如し。身を知り世を知れば、願
 はず、まじらはず、たゞ靜なるを望とし、愁なきを樂みとす。
 それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば牛馬、七珍
 もよしなく、宮殿樓閣も望なし。今さびしき住居一間の庵、み
 づから之を愛す。おのづから都に出でては、乞食となれるこ
 とを耻づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に着
 することをあはれぶ。

もし人このいへる事を疑はゞ、魚鳥のありさまを見よ、魚

餘算山の端に近し

は水にあかず、魚にあらざれば其の心を知らず。鳥は林を願
 ふ、鳥にあらざれば其の心を知らず。閑居の氣味もまたかく
 の如し。住まずして誰かさたらん。

そも、一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽ちに三
 途のやみに向はん時、何のわざをかかこたんとする。佛の人
 を教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。今草
 の庵を愛するもとがとす。閑寂に着するも障なるべし。いか
 が用なき樂みをのべて、空しくあたら時を過さん。

しづかなる曉、此のことわりを思ひつゞけて、みづから心
 に問ひていはく、世を遁れて山林にまじはるは、心をさめ
 て道を行はんが爲なり。しかるを汝の姿は聖に似て、心は濁
 にしめり。住家はすなはち淨名居士(じやうみやうこし)の跡をけがせりといへ

維摩居士。方一丈の室に起居す。

(一)釋迦の弟子。魯鈍なり。

舌根をやと

不請の念佛

(二)順徳天皇の御代。一八七

(三)作者鴨長明の法名。

(四)新勅撰集に作者源季廣とす。此の歌をの

ども、保つ所は僅かに、周利槃特(一)が行にだも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづからなやますか、はたまた安心の至りてくるはせるか。其の時心更に答ふることなし。たゞ傍に舌根をやとひて、不請(二)の念佛兩三遍を申してやみぬ。時に建曆二年三月の晦日(三)、ごろ、桑門蓮胤、外山の庵にしてこれをしるす。月影(四)は入る山のはもつらかりき。たえぬ光を見るよしもがな。——方丈記——

一八 菊花の約 其の一 上田 秋成

青々たる春の柳、家園に種うること勿れ。交は輕薄の人と結ぶこと勿れ。楊柳茂り易くとも、秋の初風の吹くに耐へめや。輕薄の人は交り易くして去るも亦速なり。楊柳幾度春に

清貧をあまなふ

染めども、輕薄の人は絶えて訪らふ日無し。

播磨の國加古の驛に、丈部左門といふ博士あり。清貧をあまなひて、友とする書の外はすべて調度の煩はしきを厭へり。老母あり、孟母の操に譲らず、常に紡績を事として左門が志を助けぬ。其の季女は同じ里の佐用氏に養はる。此の佐用が家は頗る富みさかえけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘を娶りて親族となり、屢事に託せて物を贈ると雖も、口腹の爲に人を累さんやとて、敢へて受くる事なし。

一日左門同じ里の何某が許を訪ひて、いにしへ今の物語して興じける時、壁を隔て、人の苦しむ聲いと哀れに聞えければ、主に尋ぬるに、主、西の國の人と見ゆるが、伴に後れしとて、一宿を求められしを、卑しからぬ士と見し儘返め參ら

起臥も思ふに任せず

蟲の聲花も色ある初秋の夜よしや今宵月の遊びせん無謫

せしに其の夜邪熱劇しく、起臥も思ふに任せぬがいとほしさに、三日四日を過しぬれど、何地の人とも定かならぬに、主も思はぬ過し出で、心地惑ひぬ。」といふ。左門聞きて、悲しき物語にこそ。主の心安からぬもさる事なれど、病苦の人のしる

亡き旅の空に此の疾を憂へ給ふは、わきて胸苦しくおはすべし。其のやうをも看ばや。といふを、主留めて、瘟病は人を過つものと聞ゆるものから、家童らにも敢へてかしこに行かしめず。立寄りて身を害し給ふこと勿れ。左門笑うていふ、「死生命あり、何の病か人に傳はるべき。是等は愚俗の言にて、

上田秋成筆蹟

死生命あり

漂客

實やか

吾が們は取らずとて、戸を推して入りつゝ、其の人を見るに、主が語りしに違はで、なみの人にはあらぬが、病深しと見え、面は黄に、肌は黒く瘦せ、古き衾の上に悶え臥す。人懐かしげに左門を見て、「湯一つ恵み給へ。」といふ。左門近くよりて、士憂へ給ふこと勿れ。必ず救ひ參らすべし。」とて、主と計りて薬を選び、自ら方を案じ、自ら煮て與へ、粥をすゝめて病を看ること猶同胞の如し。かの武士、左門が情の厚きに涙を流して、「かくまで漂客を恵み給ふ。死すとも御志に報い奉らん。」といふ。左門慰めて、凡そ疫には日數あり、其の程を過ぐれば壽命を過たず。吾日々に詣でて仕へ參らすべし。」と實やかに契りつゝ、心を用ひて助けけるに、病稍減じて心地清しく覺えければ、かの士、主にも懇に詞を盡し、左門が陰徳を尊みて、其の

己が身一つ
を竊む

生業をも尋ね、己が身の上をも語りていふ、我は出雲の國松江の郷に人と成りし赤穴宗右衛門といふ者なるが、僅かに兵書の旨を明らめしによりて、富田の城主鹽冶掃部介、吾を師としても、の學び給ひぬ。さても吾、近江の佐々木氏綱へ密使に選ばれて、かの館に逗留中、前の城主尼子經久、山中黨を語らひて、大晦日の夜不慮に城を乗取りしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤、三刀屋を助けて、經久を亡し給へとす。むれども、氏綱は外勇にして内怯なる愚將なれば、果さず、かへりて吾を國に逗む。故なき所に永く居らじと。己が身一つを竊みて還る路に此の疾に罹りて、思ひかけずも師を煩はしけるは身に餘りたる御恩にこそ。吾、半世の命をもて必ず報

い奉らん。左門いふ、見る所を忍びざるは人たるものの心なるべければ、厚き詞ををさむるに故なし。猶逗りていたはり給へ。といふに、赤穴實ある詞をたよりにて日を経るまゝに、物皆平生に邇くぞなりにける。

おろく

左門はよき友得たりとて、日夜交りて物語するに、赤穴も諸子百家のことおろく語り出で、とひ辨ふる心愚ならず。終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、兄たるべき禮儀ををさめて、左門に向ひていふ、吾父母に別れ參らせていと久し。賢弟が老母は即ち吾が母なれば、新に拜み奉らんことを願ふ。老母憐みて幼き心をうけ給はんや。左門喜に堪へず、母常に我が孤獨を憂ふ。信ある言を告げなば、齡も延びなんに。と、伴をひて家に歸る。老母喜び迎へて、吾が子不才にて學

青雲のたよ

ぶ所時にあはず、青雲のたよりを失ふ。願はくは捨てずして
兄たる教を施し給へ。赤穴拜していふ、大丈夫は義を重しと
す。功名富貴はいふに足らず。吾今母公の慈愛を蒙り、賢弟の
敬を受く。何の望かこれに過ぐべきと、喜び嬉しみつゝ、ぞ逗
りける。

涼しき風に
よる浪
間はでもし
るき

昨日今日咲きぬると見し尾上の花も散果てて、すゞしき
風による浪に、間はでもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子に
向ひて、吾近江を通れ來りしも、雲州の動靜を見ん爲なれば、
一たび下りてやがて歸り來り、御恩を返し奉るべし。今の別
を給へ。といふ。左門いふ、さあらば兄長いつの時にか歸り給
ふべき。赤穴いふ、月日は逝き易し。遅くとも此の秋は過さじ。
左門いふ、秋はいつの日を定めて待つべき。願はくは約し給

へ。赤穴いふ、重陽の佳節をもて歸り來る日とすべし。左門い
ふ、兄長必ず此の日を誤り給ふな。一枝の菊花に薄酒を備へ
て待ち奉らん。と、互に情を盡して、赤穴は西に歸りけり。

一九 菊花の約 其の二

八雲たつ國

あら玉の月日は疾く經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の
野ら菊にほやかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも早く
起出でて、草の屋の席を拂ひ、黄菊白菊二枝三枝小瓶に挿し、
囊をかたぶけて酒飯の設す。老母いふ、かの八雲たつ國は山
陰の果にありて、こゝへは百里を隔つと聞く。今日とも定め
難きに、其の來しを見て物すとも遅からじ。左門いふ、赤穴は
信ある武士なれば、必ず約を誤らじ。其の人を見てあわた

しからんは、思はんことのはづかし。とて、美酒を買ひ、鮮魚を煮て厨に備ふ。

人の心の秋

浦波の音こ
こもごにた
ちくるやう
なり

午時も稍、傾きぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて、心酔へるが如し。老母左門をよびて、「人の心の秋にはあらざとも、菊の色濃きは今日のみかは。歸り來る信だにあらば、空は時雨にうつりゆくとも、何をか怨むべき。入りて臥しもして、又翌の日を待つべし。」とあるに、否み難く、母をすかして前に臥さしめ、若しやと戸の外に出でて見れば、銀河影消え消えに、氷輪我のみを照して淋しきに、軒守る犬の吼ゆる聲すみわたり、浦波の音ぞこゝもとにたちくるやうなり、月の光も山の端に暗くなれば、今はとて戸をたてて入らんと

待ちわぶ

するに、只見る朧なる黑影の中に人ありて、風のまに／＼來るを怪しと見れば、赤穴宗右衛門なり。躍りあがる心地して、「小弟早くより待ちて今に至りぬ。盟違へで來り給ふことの嬉しさよ。いざ入らせ給へ」といへど、うなづくのみにて物をもいはず。左門進みて南の窓の下に迎へ、座につかしめ、兄長來り給ふことの遅かりしに、老母も待ちわびて、明日こそと臥所に入らせ給ふ。寢させ參らせん。といふに、赤穴又頭を振りてとゞめつゝ、更に物をもいはず。左門いふ、既に夜をつぎて來給ふに、心も倦み、足も勞れ給ひつらん。幸に一杯を酌みてやすませ給へ。とて、酒を煖め、下物を列ねてすゝむるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、其の臭ひを忌みさくるに似たり。左門いふ、井白の力はたもてなすに足らざれども、己が心なり。い

やしみ給ふこと勿れ。赤穴猶答へもせで長き息をつきつゝ、暫ししていふ、賢弟が信ある饗應をなど否むべき理あらん。欺くに詞なければ、實を以て告ぐるなり。必ず怪しみ給ふな。吾は現世の人にあらず、きたなき靈の、かりに形を見せつるなり。左門大いに驚きて、兄長何故に此の怪しきこと語り出で給ふや。更に夢とも覺え侍らず。赤穴いふ、賢弟と別れて國に下りしが、國人大かた經久が勢につきて、鹽冶の恩を顧る者なし。從弟赤穴丹治の富田の城にあるを訪らひしに、利害を説きて吾を經久に見えしむ。熟、經久が爲す所を見るに、萬夫の雄人に勝れ、能く士卒を訓練すと雖、智を用ふるに狐疑の心多くして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約あることを語りて去らんとすれば、

腹心爪牙

經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外に放たずして、遂に今日に至らしむ。此の約に違ふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、只管思ひ沈めども遁るゝに方なし。古人もいふ、『人一日に千里を行くこと能はず、魂能く一日に千里をも行く。』と。此の理を思ひ出でて自ら双に伏し、今夜陰風に乗りてはるゝ。來り、菊花の約につく。此の心を憐み給へ。といひ終りて、泪湧出づるが如し。今は永き別なり。只母公に能く仕へ給へ。とて、座を起つと見しが、かき消す如く見えずなりにけり。左門あわててとゞめんとすれば、陰風に眼くらみて行方を知らず。俯向につまづき倒れたるまゝに、聲を放ちて大いに哭く。老母目ざめ、驚き立ちて左門がある所を見れば、座上に酒瓶、魚盛りたる皿どもあまた列べたるが中にふ

聲を呑む

し倒れたるを、いそがはしく扶け起して、「如何に。」と問へども、只聲を呑みて泣くく、更に言なし。老母問うていふ、「赤穴が約に違ふを怨むとならば、明日もし來らば言なからんものを。」と強く諫むるに、左門漸く答へていふ、「兄長今夜菊花の約に來る。酒肴をもて迎ふるに再三辭み給うていふ、しかるの事にて約に背くが故に、自ら刃に伏して陰魂百里を來るといひて見えずなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚かし奉れ。只々赦し給へ」と潜然と泣入るを、老母いふ、「牢裏に繋がるゝ人は夢にも赦さるゝを見、渴する者は夢に漿水を飲むといへり。汝も亦さる類にやあらん。能く心を鎮むべし。」とあれども、左門頭を振りて、「信に夢のまさなきにあらず、兄長はこゝもとにこそありつれ。」と、又聲をあげて泣倒る。老母も今

漿水

まさなき

身を翰墨に
よす

は疑はず、相よびて其の夜はなきあかしぬ。

翌日左門母を拜していふ、「吾幼より身を翰墨によすと雖も、國に忠義の聞なく、家に孝信を盡さず。徒らに天地の間に居る。兄長赤穴は一生を信義の爲に終ふ。小弟今日より出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせん。尊體を保ち給うて暫くの暇を賜ふべし。」老母いふ、「吾が兒かしこに去るとも、早く歸りて老が心を休めよ。永く逗りて今日を久しき日となすこと勿れ。」左門いふ、「生は浮きたる漚の如く、且に夕に定め難くとも、やがて歸り參るべし。」とて、泪を振うて家を出で、佐用氏に行きて老母の介抱を懇に頼み聞え、出雲の國に參る路に、飢ゑて食を思はず、寒きに衣を忘れてまどろめば、夢にも泣きあかしつゝ、十日を経て富田の大城に至り、まづ赤

生は浮きた
る漚の如く
且に夕に定
め難し

社稷

穴丹治が宅に行く。丹治迎へ請じて、翼ある物の告ぐるにあ
らで、いかにしらせ給ふべきいはれなし。」ときりに問ひも
とむ。左門いふ、士たるものは富貴消息の事ともに論ずべか
らず、たゞ信義をもて重しとす。兄長宗右衛門一旦の約を重
んじ、空しき魂の百里を來るに報ずとて、日夜を逐うてこゝ
に下りしなり。吾が學ぶところに就いて士に尋ね參らすべ
き旨あり。願はくは明らかに答へ給へかし。昔魏の公叔座病
の牀に臥したるに、魏王自ら詣でて手をとつゝ、告げける
は、『もし忌むべきことあらば、何人をして社稷を守らしめん
や。吾が爲に教を遺せ。』とあるに、叔座いふ、『商鞅年少しと雖も、
奇才あり、王もし此の人を用ひ給はずば、之を殺しても境を
出すこと勿れ。他の國に行かしめば、必ず後の禍となるべし。』

横死

と懇に教へて、又商鞅を私に招き、『吾汝を勸むれど王許さざ
る色あれば、用ひずばかへりて汝を害し給へと教ふ。これ君
を先にし臣を後にするなり。汝早く他の國に去りて害を免
るべし。』といへり。此の事士と宗右衛門に比べてはいかに。丹
治只頭を低れて言なし。左門座を進みて、兄長宗右衛門鹽冶
が舊交を想ひて尼子に仕へざるは義士なり。士が舊主の鹽
冶を捨てて尼子に降りしは士たる義なし。兄長が菊花の約
を重んじ、命を捨てて百里を來しは信ある極なり。士が今尼
子に媚びて骨肉の人を苦しめ、此の横死をなさしめしは友
とする信なし。經久強ひてとゞめ給ふとも、久しき交を思は
ば、私に商鞅、叔座が信を盡すべきに、只榮利にのみ走りて士
家の風なきは、即ち尼子の家風なるべし。吾今信義を重んじ

家春

てわざとこゝに来る。汝は又不義の爲に汚名を遺せ。とて、
いひも終らず抜打にきりつくれば、一刀にてそこに倒る。家
春どもたち騒ぐ間に、早く逃れ出でて跡なし。尼子經久此の
よしを傳へ聞きて、兄弟信義の篤きを憐み、左門が跡をも強
ひて追はせざりきとなり。あゝ輕薄の人と交は結ぶべから
ずとなん。

— 雨月物語 —

(一) 渤海之東。不知幾億萬里。有二大壑焉。實惟無底之谷。其下歸墟。名曰八紘九野之水。天漢之流莫不注之。而無增無減焉。(一) 列子。

二〇 澄の江の浦

坪内逍遙

それ渤海の東方に、
底ひ知れざる壑あるを、
名づけて歸墟といふとかや。

八紘九野

八紘九野の水盡し、

(一) 列子。名は禦寇。

空に溢るゝ天の河、
流の限り注げども、
無増無減と唐土の、
至人が寓言今こゝに、
見る目はるけきわたの原。

北を望めば蒼茫と、

八重の潮路は霞籠め、
蓬が島にや通ふらん。
西を見やれば千里の波、
浩蕩として窮りなく、

(二) 蓬萊の島。渤海之東有山。岱輿。負嶠。方壺。瀛洲。蓬萊也。(一) 列子。

旦あしたに洗ふ高麗の岸、
夕陽ゆふひも其處に夜の殿。

錦繡の帳暮行けば、

紫匂ふ空の色、

何に驚く早紅葉の、

頻りに墜ちて癩かする山。

秋老あきけぬれば歎なげ乃なを、

絡かたりて渡る雁が音に、

氣も澄(一)の江の浦の波、

幾代の調や疊むらん。

(一)丹後國竹野郡。浦島子の故郷。

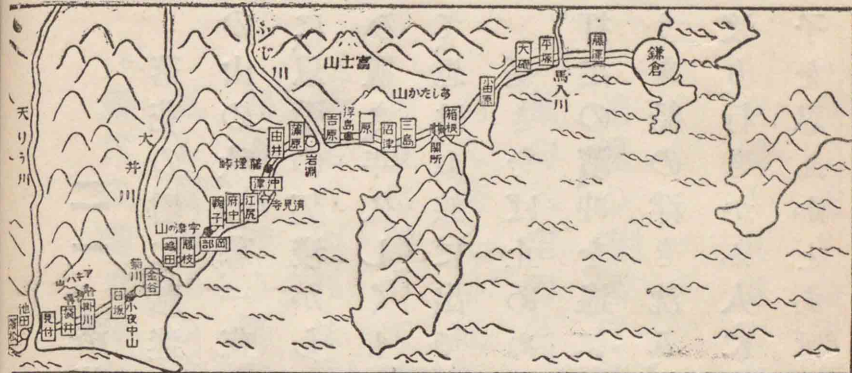
—新曲浦島—

(一)「またや見ん交野のみ野の櫻狩、花の雪、ちる春の曙、」藤原俊成(新古今集)。
(二)河内國北河内郡。
(三)「朝まだき嵐の山の寒ければ、紅葉の錦さきぬ人ぞなき。」拾遺集、藤原公任(近江國滋賀)。
(四)「買物たえずそなふる東路の勢多の長橋音もとらへに。」風雅集、平兼盛(近江より朝立ちくればうねの野にばう明けぬこの夜は、)古今集、大歌所(白露も時雨もいたくもる山は、)下葉のこらす色づきにけり」(古今集、紀貫之)。

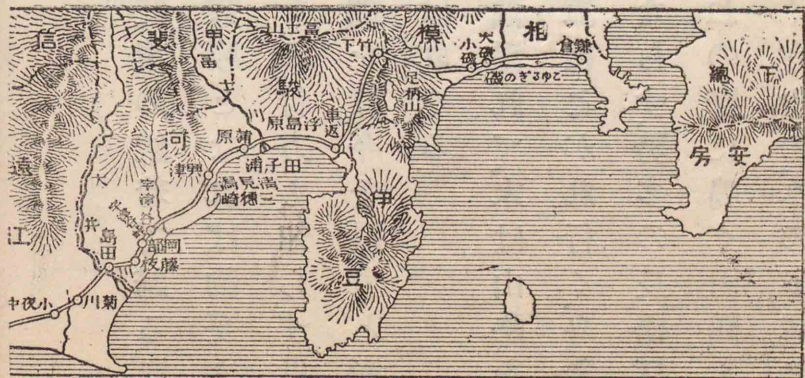
二一 落花の雪

落花(一)の雪に踏迷ふ、交野(二)の春の櫻狩、紅葉(三)の錦着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜をあかす程だにも、旅寢となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧て、思はぬ旅に出でたまふ、心の中ぞあはれなる。

憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき船の浮き沈み、駒(四)もとゞろと踏みならず、勢多の長橋、打渡り、行きかふ人にあふみ路や、世(五)をうねの野に鳴く田鶴も、子を思ふかとははれなり、時雨(七)もいたく守山の、木の下露に

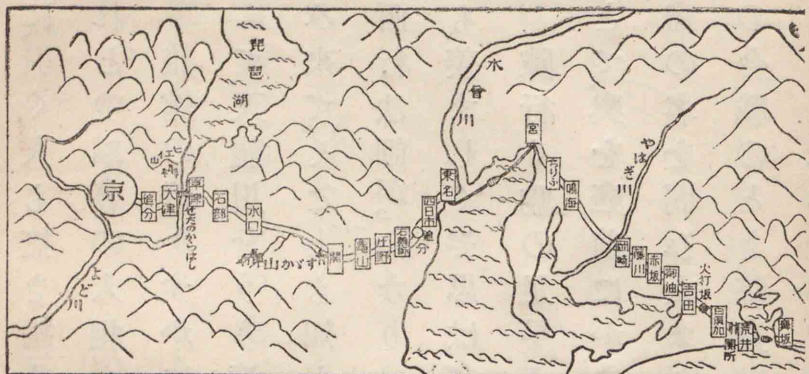


袖ぬれて、風に露
散る篠原や、篠分
くる道を過行け
ば、鏡の山はあり
とても、涙に曇り
て見えわかず、物
を思へば夜の間
にも、老その森の
下草に、駒を留め
て顧る、故郷を雲
や隔つらん。
番場、醒が井、柏

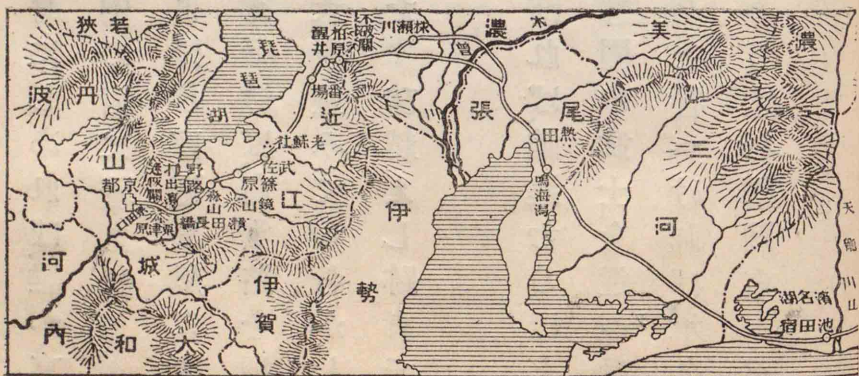


(一) 不破の關屋の板
底の荒れにし
のちたれに
の風はたれに
今集、藤原古

(二) 小夜千鳥聲
こそ近くなる
みがたにかた
むく月にしほ
や満つらん
(新古今集、藤原季能)



原、不破の關屋は
荒果て、猶もる
ものは秋の雨、い
つか我が身のを
はりなる、熱田の
八劔伏拜み、汐干
に今や鳴海瀉、傾
く月に道見えて、
明けぬ暮れぬと
行く道の、末は何
處ととほたふみ、
濱名の橋の夕汐



(一) 年たけてま
たこゆべしと
思ひきや、命
なりけりさや
の中山。(一)新
古今集、西行

(二) 遠江國榛原
郡。
(三) 仲恭天皇の承
久三年。
(四) 中御門中納言
藤原宗行。

に、引く人も無き捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰か哀
れとゆふ暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に着き給ふ。
旅館の燈かずかにして、雞鳴曉をもよほせば、匹馬風に嘶
えて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋
み来て、そのことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、むかし
西行法師が、命なりけり。」と詠じつゝ、ふたゝび越えし跡まで
も、羨ましくぞ思はれける。

隙行く駒の足早み、日己に亭午にのほれば、餉進むるほど
とて、輿を庭前にかき止む。轆を叩きて警固の武士を近づけ、
宿の名を問ひたまふに、菊川と申すなり。」と答へければ、承久
の合戦のとき、院宣書きたりし咎に因りて、宗行卿關東へ召
下されしが、此の宿にて殺されし時。

昔南陽縣菊水。

汲下流而延齡。

今東海道菊川。

宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、哀れ
やいとゞまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれ
ける。

古もかゝるためしをきく川の

おなじながれに身をや沈めん

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の
行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷓首の船に乗り、詩歌管絃の
宴に侍りしことも、今はふたゝび見ぬ夜の夢となりぬと思
ひつゝ、けたまふ。島田、藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れ
て、物のかなしき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦かづら

(一) 山城國葛野郡
嵯峨にあり、
今の天龍寺こ
れなり。

(一)「駿河なるう
つ山のべのう
つにも、夢
にも人に逢は
ぬなりけり。」
(伊勢物語)

(二)「富士のねの
煙はなほぞ立
ちのぼる、上
なきものはお
もひなりけ
り。」
(新古今集、藤
原家隆)

いと茂りて道も無し。むかし業平の中將の、すみかを求めんとて、あづまの方へ下るとて、夢にも人に逢はぬなりけり。と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎたまへば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いと涙をもよほされ、向ふはいづこみほが崎、興津、蒲原うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、^(二)明くる霞に松見えて、浮島が原を過行けば、汐干や淺き船見えて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車返、竹の下道行惱む、足柄山の峠より、大磯、小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもは無けれども、日數積れば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。 — 太平記 —

二二 孤松を愛する日本 志田義秀

日本は櫻の國であると同時に、松の國である。上古には特に孤松を愛するといふ思想が、最も強い色彩を以て國文學上に現れて居る。

人心の常として、大なる事物に對して一種畏敬の念を起ぬのは、自然の心理である。隨つて大樹巨木に對しても、樹木以上の觀念を以て之を觀るのは、洋の東西、時の古今を問はず事實である。陸前宮城野の大銀杏は、銀杏老母大神と稱せられ、磐城の大椿は椿明神と崇められ、其の他各地に神木と稱せられて、或は注連を張られ、或は供物の獻ぜられるもののあるのは珍しく無い。孤松を愛するといふ思想も、つまりは此の思想の一部ではあらうが、吾等の祖先は、松に對して

神格

は畏敬の念を起すよりも、寧ろ親愛の情を以て接したかと思はれる。神さぶと形容したのは多少あるが、萬葉集に於ける松の歌凡七十首の中、神さぶと詠んだのは、三首を數へるに過ぎぬ。日本人が松に對する思想は、杉や、榎や、楠や、銀杏のやうな樹に對するのとは、いさゝか趣を異にして居つて、是等のものに對しては、凄^いといふ感が主となるのであるが、松に對しては、氣高いといふ感が主となつて居る。高砂の尉のやうな神格は、松にして始めて現れ得るのである。

余は特に孤松といつたが、上古に於ては、孤松といふ感が他の樹木のそれに於けるよりも、特に強かつたやうに思はれる。吾等の祖先は、一つ松といふ成語を有して居て、それが古くから詩歌に歌はれて居る。支那でも、陶淵明の歸去來辭

に、撫孤松而盤桓^{（一）}などといつてゐるが、我が國ではもつと早くから見えて居つて、決して支那思想の影響では無い。日本武尊が、東夷征伐の歸路、伊勢國尾津の崎で、其處なる一つ松の下に忘れられた劔が、失せずにあつたのを御覽になつて、尾張に、たゞに向へる、尾津の崎なる、一つ松吾兄^{（二）}を、一つ松、人にありせば、太刀佩けましを、衣着せましを、一つ松吾兄を。

と歌つて讚歎せられた。是が一つ松の物に見えた抑の初であらうと思ふ。古事記傳に據ると、此の一つ松は、八劔宮の地に、劔掛の松といつて、其の蹟を残して居るとあるから、宣長翁の時代には、其の幾代目かが尙植ゑつがれてあつたものと見える。此の歌によつて見れば、吾兄といはれるほど擬人

（一）本居宣長の著。古事記の註釋。

せられ、親愛せられて居つて、恰も我が最愛者に對するやうな感情を向けられて居たことが分る。

萬葉集六の卷の市原王が活道岡いさだのおかの孤松の下で詠まれたといふものに、

一つ松幾代か經たる吹く風の

こゑの澄めるは年深みかも

(一)「いざ兒どもはやく日本へ大伴の御津の濱松まち戀ひぬらん。」(山上憶良)
(二)「石屋月に立てる松の木汝を見るれば昔の人を相見る法師。」(博通)

此の歌は、後の歌集にも採られて居つて、松の齡を歌つた歌のやうであるが、其の齡の高きを想ひ遣つた處に、敬愛の情を含んで居ると思ふ。然らざるも萬葉集中の松の歌は、或は「御津の濱松まち戀ひぬらん」とか、或は「汝を見れば昔の人を相見る如し」とかいふやうに、之を擬人し、敬愛した趣のものが多い。

(一)我が國最古の漢詩集。天平勝寶三年(一三三)淡海三船撰む。

萬葉の歌に並んで、懷風藻(一)に中臣大島の詠「孤松」といふ詩のある事を忘れてはならぬ。

隴上孤松翠 凌雲心本明。

餘根堅厚地 貞質指高天。

弱枝異萬草 茂葉同柱榮。

孫楚高貞節 隱居悅登輕。

此の詩に於ては、懷風藻其のものが、支那勢力の下にあるものであるが如く、全く支那流の松によせて高節を尙ぶ思想を現して居る。

立歸つて歌の方を見ると、平安朝以後に於て、一つ松と詠まれたものは、新古今以後の歌集に數見え、其の頃に至つては、歌のみならず、畫題にも採られて、後拾遺には「屏風の繪に、

(一)「一本の松の
もししぞたの
心なき千代と
見つれば。」
(二)平安朝末に出
てたる小説。
(三)正親町天皇の
猶子。唐崎松
記は後陽成天
皇の天正九年
年植松の由來
唐崎松記す。

(四)福澤諭吉。

海のほとりに、松の一もとある所を。とあつて、源兼隆の歌が
載つて居る。其の他、御津の濱松の歌に依つて、濱松中納言物
語が題號を得、唐崎の一本松が、尊朝法親王の唐崎松記に書
かれたなど、注意すべき事實も少くは無い。

吾等の祖先が、孤松を愛し之を歌つた事は、以上の如くで
ある。近世に至つては、特に孤松を歌ふといふ事は少いやう
であるが、各地の名所古跡に名ある孤松のあることは、今も
昔に變ることとは無い。さうして其の亭々たる姿、神々しい有
様が、吾等國民の性情を陶冶しつゝある事も、つゆ古に異な
らぬのである。日本人は、櫻の如き花々しい潔い方面をも有
するが、松の如き剛健な高節な方面も持つて居る。其の中で
も、福澤翁のいはゆる獨立自尊、他人にたよらず、我が一己の
節を固く持するといふ美點がある。併しながら此の最後の
美點は、孤松が文學に歌はれる事の少くなると同じく、近世
に近づく程減少しつゝあるかと疑はれる。冀はくは、自今以
後、文學の上にも、時代精神の上にも、孤松の復活を期したい
ものと思ふ。

二三 儒の道をわらふ 本居宣長

論語

論語に、(一)既焚子退朝曰傷人乎不問馬。これ甚だいかがなり。
すべて人の家の焚けんにも、人はさしも焼かるゝものにあ
らず、馬はよく焼かるゝものなり。まして馬屋の焼けんには、
人は危きこと無し。馬こそいと危けれ。されば馬をこそ問ふ

(一)孔子。

まなびの子

べけれ。これ人情なり。然るにまづ人を問ふすらいかがなるに、馬を問はざるはいと心無き人なり。但し人を問へるはさることなれば記しむべきを、馬を問はぬが何のよきことかある。これまなびの子どもの、孔丘が常人に異なることを人に知らさんとするあまりにかへりて孔丘が不情をあらはせり。不問馬の三字を削りてよろし。

雪螢を集めて書讀みける唐土のふるごと

もろこしの國に、むかし孫康といひける人は、いたく學問を好みけるに、家貧しくして、油をえ買はざりければ、夜は雪の光にて書を読みつ。また同じ國に車胤といひける人も、いたく書讀むことを好みけるを、これも同じやうにいと貧しくて、油をえ得ざりければ、夏の頃は、螢を多く集めてなん讀

ものす

はつく

みける。此の二つの故事は、いとく名高くして、知らぬ人無く、歌にさへなん多く詠むことなりける。今思ふに、これらも彼の國人の、例の名を貪りたる作りごとにぞありける。其の故は、若し油を得ずば、夜々は近となりなどの家にも、のして、其のともし火の光を乞ひかりても、書は讀むべし。たとひ其のあかり心にまかせず、はつくなりとも、雪螢にはこよなく勝りたるべし。又年の中に雪螢のあるはしばしの程なるに、それが無き程は、夜は書讀までありけるにや、いとをかし。

富貴を願はざるをよき事にする論

世々の儒者、身の貧しく賤しきを憂へず、富み榮ゆるを願はず。喜ばざるをよき事にすれども、之は人の眞の情にあらず。多くは名を貪る例の偽なり。希々にさる心ならんものあ

ひがもの

りとも、それは世のひがものにこそあれ、何のよき事ならん。理
ならぬふるまひして、あながちに願はんこそは悪しからめ。
ほどくゝに勤むべき業をいそしく勤めて、なりのほり、富み
榮えんこそ、父母にも祖先にも孝行ならめ。身衰へ家貧しか
らんは、上なき不孝にこそ有りけれ。たゞおのが潔き名を貪
る餘りに、まことの孝を忘るゝも、亦もろこし人のつねなり
かし。

儒者の皇國の事をば知らずとてある事

からめかす

儒者に皇國の事を問ふに、知らずといひて耻とせず。から
國の事を問ふに、知らずといふをばいたく耻と思ひて、知ら
ぬことをも知顔にいひまぎらはす。こはよろづをからめか
さんとする餘り、其の身をも漢人めかして、皇國をばよその

國のごともてなさんとするなるべし。されど、なほから人に
はあらず、御國人なるに、儒者とあらんもの、おのが國の事
知らであるべきわざかは。但し皇國の人に對ひては、さあら
んもから人めきてよかんめれど、若し漢國人の問ひたらん
には、我はそなたの國の事はよく知れれども、我が國のこと
は知らずとは、さすがにえ言ひたらじをや。若しさもいひた
らんには、己が國の事をだにえ知らぬ儒者の、いかでか人の
國の事をば知るべきとて、かれ手を拍ちていたくわらひつ
べし。

—玉がつま—

二四 國 學

平 田 篤 胤

學問は色々ある。其の中に何の學問がいつち大きいぞと

いふに、ちと自分勝手のやうなれども、皇國すなはち我が國の學問ほど、大きい物は無いでござる。なぜといふに、先づ近く儒學と佛學との上で申さば、儒者は最初四書五經とか、十三經とかいふ類の書物を讀むことを覚え、また左國史漢といつて、左傳といふもの、國語といふもの、史記といふもの、漢書といふものなどを粗々讀んで、さて漢文を綴る方を覺えたり、其のふだんの口ずさみに、詩を作ることも覺え、ると、もう儒者といつて通られるが、何のこれしきの書物を讀んで、これしきのことを覺えるに、さして難いことは、ありや致さんでござる。大方世間の儒者は、皆此の位なものでござる。さて其の儒者に比べては、出家の方がよつほど廣い。なぜといふに、己が是非讀まねばならぬと極めた俗にいふ經文

おもと

が五千餘卷、馬に付けたならば、七八駄あらう。それをみんな讀まず、十分の一を讀んだ所が、ざつと儒者がおもと讀まねばならぬ書物の、一倍もあるでござる。それのみならず、儒者は佛書を讀まんでも、事が缺けぬによつて、とんと讀まず、たまたま佛書を讀む儒者もあれど、そりや百人に一人も無い。僧徒はそれと事かはり、儒者のおもとと見る書物をば、子供の時から文字を知る爲に讀んで置く。又詩も漢文も儒者と同じやうに作りもする。そこで僧徒の學問は儒者よりは廣いでござる。

さて皇國の學問がいつち廣いといふ故は、右申す通り、儒學、佛學を始め種々さまざまの學問があつて、其の道々のところと事とが、盡く皇國の學び事に混雜して、譬へば彼の八

天漢

紘九野の水天漢の流これに注がずといふこと無しといふ如くでござる。其の通り入混つてある故に、人の心もそれに従つて移り、いづれを是とも、いづれを非とも別ちかねて、言はゞまごついて居ることが多くある。それ故に、其の混雜を

春秋命歴序
考をかき
へてしりへ
日本神の道授
けしからかて
からし人のい
からめいかも
開き得いぞも
日開し本
き初ける
篤胤



蹟筆胤篤田平

つぶさに分けねば、眞の道の有難き所も顯れず、其の混雜をより分けて、眞の道の害となることをいひ顯さうとするに
ついては、よく先方の事をも知らねばならず、彼の唐人蘇子
由といふ者の、善與人言者。因其人之言。而爲之言。則天下之辯
者服矣。云々と申したる如く、此方の事ばかり言つたのでは

いかず。例へば僧徒を論すには佛書で言ふと、ぎうの音も出
ず。儒者をさとすには儒書で論ずれば、猫に逐はれた鼠のや
うにかしこまる。されば皇國の純らと正しい道を得ようと
するには、それに心得なくては叶はぬ事でござる。殊にもろ
もろの學問の道、たとひ外國の事にしろ、皇國人が學ぶから
は、其のよき事を選んで、皇國の用にせうとのことでござる。
さすれば、實は漢土は勿論、天竺、阿蘭陀の學問をもすべて皇
國學びといつても違はぬ程のことで、即ちこれが皇國人に
して、外國の事を學ぶ者の心得でござる。 — 古道大意 —

（一）明和九年三月。あかりゆく。明くるなる。郡。大和國磯城郡。心ゆく。氣がすむ。岸。吉野川の北岸。岸。吉野川の南岸。伊勢物語、業平東下り、隅田川の條に「渡守」はや舟に乗れぬ。日も云々。上市町の南岸。

自讀文

一 菅笠日記

本居宣長

八日。初瀬を出でし後、雨ふらで四方の山の端もやう／＼あかりゆきつゝ、
 多武の峯のあたりにてはなごりもなく晴れたりしを、今日も亦いとよき日
 にて、吉野も近づきぬれば、けさはいと足かるく、みな人の心ゆく道なれば
 にや、ほごもなく上市に出でぬ。此のあひだは一里とこそいひしか、いと近く
 て、半里にだにも足らじとぞ覺ゆる。吉野川ひまもなくうかべる筏をおし分
 けて、こなたの岸に船さしよす。夕暮ならねば、渡守は「はや」ともいはねど、みな
 いそぎ乗りぬ。
 あなたの岸は飯貝といふ里なり。さて川べにそひつゝ、すこし西に行きて、
 丹治といふ所より吉野の山にかゝる。やゝ深く入りもてゆきて、杉むらの中

(一)吉野川の北の渡。古の六田の淀。

おほかる限り多い頂上。

をこの者ばか者。

心づきなしおもしろくない。

むらぎえたるまだらに消えのこつた。

わが國人宣長と同郷なる伊勢の國人。

物すれば行けば。

うかいひつけねらひをつけ

かけてもまるで。

けにやせいであらう。

うつるふ散る。

(一)吉野金峰山の鎮守。金剛藏王権現を祀る。

(二)藏王堂を去る三町。大寶年中。行者役小角山上修行の庵。いふ。後、南朝の遺蹟となす。今吉水神社がある。

に四手掛しでかかの明神と申すがおはするは吉野の山口神社なんどにあらぬにや。されどさいふばかりの社とも見えす。此の森より下にも上にも、此のわたりなべて櫻のいとおほかる中をのぼり／＼て、登りはてたる所、六田(一)のかたより登る道との行きあひにて、茶屋あり、しばしやすむ。此の屋は過ぎこし坂路よりいと高く見やられし所なり。こゝより見わたすところを一目千本といひて、大かた吉野のうちにも櫻のおほかる限りとぞいふなる。げにさもありぬべく見ゆる所なるを、誰てふをこの者か、さるいやしげなる名はつけけんといと心づきなし。

花はおほかた盛すぎて、今は散残りたる梢ごもぞ、むらぎえたる雪のおもかげして所々に見えたる。そも／＼此の山の花は、春立てる日より六十五日にあたるころほひなん、いづれの年もさかりなると世にはいふめれど、又わが國人の來て見つるごもに問ひしには、かのあたりのさかりの程を見てここに物すればよき程ぞと、これもかれもいひしまゝに、其の程うかいひつけていで立ちしもしろく、道すがらとひつゝ來しにも、よきほどならんと多く

はいひつる中に、まだしからんとこそいひし人もありしか、かく盛過ぎたらんとはかけても思ひよらざりしぞかし。なほこゝにてくはしく問ひきけば、此の二月のつごもりがた、いと暖なりしけにや、例の年のほどよりも今年はいとはやく咲出で侍りつるを、いにし三日四日ばかりやさかりとはまうすべかりけん。そも雨しげく風ふきなんぞせし程に、まことに盛と申しつべき頃も侍らぬ様にてなんうつろひ侍りにしと語るを聞けば、其の年々の寒さぬるさにしたがひて、おそくも疾くもあることにて、必ず其の程とかねては此の里人もえ定めぬわざにぞ有りける。

こゝは吉野の里に入る口にて、これよりは町屋たちつゞけり。まづやざりをとらんとて、藏王堂(一)にはまゐらで過ぎゆく。堂はあなたにむかひたれば、かの門はうしろの方にぞたてりける。其のあたりいきよげなる家たづねて、宿を定めて、まづしばしうちやすみ、物くひなんぞして、けふ明日の事ごもかたらひ、道しるべきものやとひて、まづ近き所々を見めぐらんとて出でたつ。此の借りつる宿は箱やの何がしとかいふものゝ家にて、吉水院(二)ちかき所

物ふりたる古びた。

たすまひ

有様。

かけまくはか

しこけれど

し上げて申

が多いことだ

煙ふきつゝ

煙草のみなが

ら。

(一)吉野水分峰。

子守明神とい

ひまなく

すきまなく。

なりければまづまうづ。此の院は道より左へいさゝか下りて、又しばしのぼる所はなれたる一つの岡にて、めぐりは谷なり。後醍醐の帝のしばしがほごおはしまし、所とて、有りしまゝにのこれるを、入りて見れば、げに物ふりたる殿のうちのたゝすまひ、よのつねの所とは見えす。かけまくはかしこけれど、いにしへの心をくみてよし水の

ふかきあはれに袖はぬれけり

かのみかごの御像、後村上帝の御手づから刻み奉り給へるとておはしますを、拜み奉るにも、

のこる御影を見るもかしこし

又そのかみのふるき御たから物どもあまたありて見けれど、ことごとくはえしも覺えず。此の寺の内にさゝやかなる屋のまへ、うちはれて見わたしのけしきいとよきがあるに、たち入りて煙ふきつゝ見わたせば、子守(一)の御社の

山むかひに高く見やられて、其の山にも、かたへの谷なんごにも、ひまなく見ゆる櫻ごもの、今は青葉がちなるぞ返す返すくちをしき。さはいへご奥なる花は、さかりと見ゆるもなほあまたありて、

みよし野の花は日數もかぎりなし

青葉のおくもなほさかりにて

瀧櫻といふもかしこにありと教ふ。

咲きにはふ花のよそめはたちよりて

見るにもまさる瀧の白絲

暮るゝまで見るとも飽く世あるまじうこそ。

さて藏王堂に詣づ。御とばり掲げさせて見奉れば、いともく大きな御像の、忿れるみ顔して、かた御足さゝげていみじうおそろしきさまして立ち給へる三はしらおはする。たゞ同じ御やうにて、けちめ見え給はず。堂は南むきにて、たても横も十丈あまりありとぞ。作りざまいとふるく見ゆ。まへに櫻を四隅にうゑたる所のあり、四本櫻といふとかや。堂のかたはらより西へ石

御像
藏王(金剛藏
王)の像。

けぢめ
差別。

前の限り
つかり。

の階をすこしくだれば、すなはち實城寺なり。本尊のひだりのかたに後醍醐天皇、右に後村上院の御位牌と申す物たゞせ給へり。此の寺も前の限り、藏王堂のかたにつゞきて、後も左も右もみなやゞ下れる谷なり。されどかの吉水院よりはやゞ程ひろし。此の所はかりそめながら五十年あまりの春秋をへて、三代の帝のすませ給ひし御行宮の跡なりと申すはいかゞあらん。事たがへるやうなれど、をり／＼おはしましなれどせし所にてはありぬべし。今は堂も何も造りあらためて、そのかみの名残ならねど、なほめでたく心にくきさま、こと所には似ず。此の寺を出でて、もとの道に歸り、櫻本坊などいふを見て、勝手の社は此の近き年焼けぬるよし、今はたゞいさゝかなるかりやにおはしますを、をがみてすぎ行く。此の社のとなり、袖振山とて、こだかき所にちひさき森のありしも、同じ折に焼けたりとぞ。御影山といふも此の續にて、木しげきもりなり。竹林院、堂のまへにめづらしき竹あり。一つふし毎に四方に枝さし出でたり。うしろの方におもしろき作庭あり。そこよりすこし高き所へあがりて、よもの山々見わたしたるけしきよ。まづ北の方に藏王堂、町

こと所
他所。

物より
何物よりも。

(一)大和國高市郡。

(二)吉野郡龍門村。

(三)南葛城郡。大和國西界の峻

はるに
遙に。

おどろかせど
傍の者が注意
をするが。
(四)いざ今日は
春の山邊にま
じりなんなく
れなばなげの
花の蔭かほの
法師

屋の末につゞきて物より高く目にかゝれり。なほ遠くは多武の山、高取山、それにつゞきて東北(一)の方に龍門(二)の嶽なんぞ見ゆ。東と西とは谷のあなたにまぢかき山にあひつゞきて、かの子守の御社の山は南に高く見あげられ、西北(三)のかたに葛城山はいど／＼はるに霞の間より見えたるなんぞ、すべてえもいはず、おもしろき所のさまなり。

花どのみ思ひ入りぬる吉野山

よものながめもたぐひやはある

時うつるまでぞ見をる。ゆくさきなきなほ見どころはおほきに、日くれぬべしとおどろかせど、耳にも聞きいれず、くれなばなげのなんぞうち誦(四)して、

あかなくに一よはねなんみよし野の

竹のはやしの花のこの本

かくはいへど、ゆくさきの所々もさすがにゆかしければ、そこにたてる櫻の枝に、此の歌はむすびおきて立ちぬ。

二 羽衣の傳説

駿州の三保の松原、空も水も一つ色に澄渡つて、遙に見やる富士の高嶺の雪、近くは寄返る荒磯の波と、天地を青と白に染分けて居る。いづくよりともなく、一片の白雲のやうにひらりとこゝに下り立つたものがある。照る日に輝く薄衣を松が枝に掛けて、清い汀に浴したのは天つ少女である。白龍といふ此のわたりの漁夫、此の薄衣を松の上に見つけて携へ歸らうとする。それを取られては再び天に上ること叶はず、是非かへし給へと歎けば、天人の舞樂を奏し給は、いかへし申すべしと、こゝに奏づる霓裳羽衣の曲。天つ少女は羽衣を得て、天上へ歸つて行くといふのが謠曲『羽衣』の概要である。謠曲の文には佛語が加つて居つて、其の文を見ると、お寺の欄間などに彫つてある天女を聯想するが、これは我が太古から傳はつた神話である。しかもそれが方方にあつたのである。

(一)元明天皇の御代諸國に命じて上進せしめられた地方志。

古い風土記の今日に残つて居る文から見ると、近江國と丹後國とに同じ

やうな話がある。近江國伊香郡與胡郷伊香小江に八人の天つ少女が白い鳥となつて、天から下つて江の南の津に浴した。伊香刀美といふ男、こは神に相違なからうと覗つて居たが、竊に白犬をやつて、一人の天女の羽衣を盗ませた。神女之が爲に遂に天上に歸ること能はず、伊香刀美の妻となつて、男女各二人の子を産んだ。

もう一つは、丹後國丹波郡三家西北の隅の方に、比治里といふ所がある。此の比治山の頂に眞井といふ井があつたが、或時天女七人こゝに來て浴した。わなさ老夫、わなさ老婆といふ老人夫婦が之を見て、其の一人の羽衣を取隠した。其の天女はやむことを得ずして、老夫婦の子となつて、十年程住んだが、其の間に天女はよい酒を醸し、一杯飲めば萬病立ちどころに癒るといふので、老夫婦の家は忽ちに富みさかえた。然るに思知らずの老夫婦は、其の後此の天女を追出したので、天女は天に歸ることも出來ず、諸處を流浪したといふ話である。白鳥の下つた話は尙常陸風土記にも見えて居つて、其の話に多少の相違はあるが、とにかく餘程ひろく傳播した話らしく見える。謠曲の『羽

衣』は、畢竟其の美しい古傳説を基礎として作つたものである。

所が面白いことには、これは決して日本固有のものではなくして、世界中に弘くひろがつて居る話である。西洋では白鳥即ちスワン^(一)が最も美しい上品な鳥と考へられて居るが、天女が此の白鳥となつて浴して居る中、其の羽を取られて歸れなくなるといふ同じ筋の話が澤山ある。よつて傳説學者は之をスワン・メイドン式の説話と名づけて居るのである。所々國々によつて少しづつ違ふが、大體の筋は變らぬのである。瑞典では、若い獵師が三つの白鳥が羽を棄て、海中に浴するのを見付けた。其の中の一つの羽衣を隠して置く^(二)と、他の二つと一所に歸れぬので、遂に其の獵師の妻となつたといふ。露西亞のミハイロイワノウイツチといふ男は海邊を逍遙して、水中に浴して居る一羽の白鳥を見た。矢を以て射取らうとすると、やがて美しい女となつて現れた。

白鳥ばかりでなく、外の鳥の話になつて居るものもある。極北に近いフィンランド人の話では、死んだ父親が三人の息子の夢枕に立つて、夜海邊へ行つ

Swan.

Swan Maiden.

Michailo Ivanovitch.

Finland.

て雁を見よと告げる。二人は闇夜を恐れて行かなかつたが、一番末の弟は夜中張番をして居る。夜明方に三羽の雁が来て、皆其の羽を脱いで美しい少女となつて海水に浴した。其の中の最も美しい一人の羽衣を隠して渡さぬので、少女は遂に其の男の妻となつた。雁でなくて家鴨と傳へられて居る所もあるが、又或地方では鳩になつて居るものもある。

地つゞきの亞細亞歐羅巴ばかりでなく、南亞米利加のギヤナにも同じ話がある。アラワックスといふ土人の話に、或時一人の獵師が美しい鳥をつかまへた。これは天上に國を有する王様アヌアニマの娘で、やがて人間の形になつて、其の獵師と結婚したといふ。これには尙長い話がある。エスキモーでは其の鳥が海鳥になつて居る。

ポメラニヤの話に次のやうなのがある。獵夫が森の中をたどつて沼の脇へ出ると、一人の少女が沐浴して居るのを見た。多分近處の村からでも來たものど考へて、いたづらに其の着物を隠した。少女は水から上つて是非返してくれといふのを拒絶して、遂に其の少女を妻とした。其の着物は錠をおろ

Guiana.

Arawax.

Ananima.

Pomerania.

して箆笥の中へ入れておいたが、夫の不在中妻は其の姑に向つて、是非其の着物を見せてくれといふ。姑がそれを出して見せると、忽ちそれを持つて見えなくなつてしまつた。夫は歸宅して妻の行方を尋ねると、これから色々の冒險譚になるのである。

或地方になると、鳥ではなくして獸になつて居るものもある。海豹が毛衣を脱いで浴して居る話もある。やはり同様に人の妻となつて子供まで産むが、子供が何の氣もなく其の毛皮を母に見せると、母は忽ち本の海豹になつて海に躍入るなどといふものもある。

白鳥が雁や鳩や、色々な鳥になり、はては獸にまで變つて居るが、其の道筋は全く同じである。これは其の國の風土、動植物の差から起つて來るのである。謠曲の『羽衣』には鳥の事はないが、前に舉げた近江、丹後、常陸等の風土記の話も皆白い鳥である。天から少女が下つたといふ話には、天武天皇が吉野の瀧の宮にお出でになつて、唯一人琴を弾じていらせられると、雲の中で少女が袖を振つて躍つたのを御覽せられた事がある。これがそも／＼五節の舞

といふものの始であるが、つまりは同種類の話である。かういふ世界一般に擴がつた話が太古からあるといふことは、面白いことでは無いか。

三 外人の眼に映じたる富士 福本日南

(一) 佛人マズリエ
は其の著「日
本」より譯出
したもの

擇壁
はさへるか

富士なる哉、富士なる哉。此の山は日本人が自家の本國の象徴とする所なり。此の國の詩人は之を稱して日本の保護神と爲し、又藝術の寶庫と爲せり。其の山となりや、擇壁を以て四方四周に幾多の湖水を堰止めたる山又山の中央に、超然として圓錐形の頭角を現し、帝王の寶冠を戴きて、端然として玉座に立たせ給ふに肖たり。たゞ其の玉體は千七百七年に噴出したる寶永山と稱する尊嚴冒瀆の惡山の爲に、一方の圓滿を缺蝕せられ給ふぞ遺憾なる。爾後今日に至るまで此の國の詩人が咨嗟の聲を絶たざるもの、亦宜なりと謂ひつべし。

此の帝王御衣の裳は優然として南西の方に曳かれ、且其の長く曳きはへ給へる御裳は駿河の灣に浸されたり。若しそれ太平洋に浮び、冲合遙なる方

水涓 みぎは、ほとり。

紅暎 あさひ。

丹青家 畫家。

よりながむれば、山は宛然蒼海の中より現出せるかと思はる。嶽皇陛下の神聖を仰ぎ奉るは、實に此の間に在り。
然れども壯觀美麗は此に止らず。其の最も美觀なるは、相模の灣の水涓なる鎌倉より望む間にあり。一たび身を此の間に置けば、函根の青山は山腰を包み、其の青山より南に奔出したる山脈の伊豆半島は、別に一抹の翠黛を引き、遠近相應じて配合の致を極め、紅暎將に昇らんとする曉天の朝、蒼色將に合はんとする暮靄の夕、彼の山を仰げば、心も遠く、思も遙なり。

若し又東京より願れば、徐に罩むる春霞の裏、坐ろに蔽ふ秋霧の間に、霞を脱れ、霧を出で、白雪を戴ける圓錐の寶冠を百萬の屋上に冠らすも、亦又崇高無限の情あり。是の故に丹青家は富士の衆觀を描き、鐵筆家は又其の諸相を鏤めて已まず。雪の富士あり、霞の富士あり、朝の富士あり、夕の富士あり。月の桂を挿し、富士、霧の海より出でし富士、蘆間の上に高き富士、竹の葉越に見ゆる富士、白帆に半面を隠し、富士、釣竿の下に臥せる富士、夕日の圓面に入れる富士、鷗飛びかふ波間の富士、帆檣林立せる埠頭の富士、星斗闌干たる

秋夜の富士、寫さる所なく、畫がかざる所なし。如何に彼日本人が天然を喜び、自然を賞で、親愛を富士に寄せたるかを觀る可し。
——日南集——

四 和歌百首

あをによし奈良の都は咲く花の匂ふがごとくいま盛なり	小野老
あらたまの年たちかへるあしたより待たるゝものは鶯の聲	素性法師
三島江の霜もまだひぬ蘆の葉のつのがむほどの春風ぞふく	藤原通光
を筑波も遠つ足尾もかすむなり嶺こし山こし春や來ぬらん	賀茂眞淵
明日よりは若菜摘まんと占めし野に昨日も今日も雪はふりつゝ	山部赤人
鶯のあかつきおきの初こゑに今はとしらむ春の夜の月	香川景樹
つくづく春のながめの寂しきはしのぶにつたふ軒の玉水	僧行慶
山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえくかゝる雪の玉水	式子内親王
照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき	大江千里
大堰川月と花とのおぼろ夜にひとり霞まぬ浪のおとかな	小澤蘆庵

(一)常陸國。
(二)下野國。

(三)京都嵐山の下
を流る。保津
川の下流。桂
川の上流。

薄墨にかく玉章と見ゆるかな霞みてかへる春のかりがね
 大空は梅のほひにかすみつゝ曇りもはてぬ春の夜の月
 空はなほ霞みもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月
 夕月夜汐みち來らし難波江の蘆のわか葉をこゆるしら波
 櫻ちる木のした風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける
 櫻狩雨はふりきぬ同じくはぬるとも花のかけにかくれん
 春來てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ
 高砂のをのへの櫻さきにけり外山の霞立たずもあらなん
 梅が香をさくらの花に匂はせて柳が枝にさかせてしがな
 み山木のその梢さも見えざりし櫻は花にあらはれにけり
 夏山の青葉まじりのおそ櫻はつ花よりもめづらしきかな
 いにしへの奈良の都の八重櫻今日九重にほひぬるかな
 行きくれて木の下蔭を宿とせば花やこよひの主ならまし
 またや見ん交野のみ野の櫻狩花の雪ちる春のあけぼの

津守國基
 藤原定家
 藤原秀能
 紀貫之
 讀人しらす
 藤原公任
 大江匡房
 中原致時
 源頼政
 藤原盛房
 伊勢大輔
 平忠度
 藤原俊成

八重霞
 いく度か重り
 立つ霞
 一重は霞の
 此の霞の一重
 は霞の鹽をや
 く煙であつ
 た。

山寺の春のゆふぐれ來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける
 大堰川かへらぬ水に影見えて今年も咲ける山ざくらかな
 吉野山霞の奥は知らねども見ゆるかぎりは櫻なりけり
 かはず鳴く神奈備川にかけ見えて今や咲くらん山吹の花
 春雨のふるは涙か櫻花ちるを惜しまぬ人しなければ
 すみだ川蓑きて下す筏士にかすみあしたの雨をこそ知れ
 藻鹽やく難波の浦の八重霞一重は蟹のしわざなりけり
 春の野に董つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける
 萩の葉の身にしむよりも春風の花に聲なきゆふぐれの庭
 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづくに月宿るらん
 蓮葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく
 いづ方に鳴きてゆくらん時鳥淀のわたりのまだ夜深きに
 聞きたびに珍しければ時鳥いつも初音のこちこそすれ
 ほとゞぎす鳴きつる方を眺むればたゞ有明の月ぞ残れる

龍因法師
 香川景樹
 八田知紀
 厚見王
 紀貫之或は
 大友黒主とも
 加藤千蔭
 契沖
 山部赤人
 松平定信
 清原深養父
 僧正遍昭
 壬生忠見
 權僧正永縁
 後醍醐寺實定

待たじと思へば
あきらめて待
つまいと思へ
ば生憎に時鳥
の啼きさうな
雨もよひの空
になつて來
た。
夏なき年云々
あまりに涼し
いので夏を忘
れた。

いかにせん來ぬ夜あまたの時鳥待たじと思へば村雨の空
橋のかをれる宿のゆふぐれに二聲なきて行くほととぎす
松かげの岩井の水を掬ひあげて夏なき年とおもひけるかな
昨日こそ早苗どりしかいつの間に稻葉そよぎて秋風の吹く
八重葎しげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋は來にけり
春はたゞ花のひとへに咲くばかり物の哀は秋ぞまされる
うづら鳴く眞野の入江の濱風に尾花なみ寄る秋のゆふぐれ
濡れてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我は經にけり
淋しさに宿を立出でてながむればいづこも同じ秋の夕ぐれ
月見れば千々に物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど
秋風にたなびく雲の絶間より洩れいづる月の影のさやけさ
村雨の露もまだひぬ槇の葉に霧たちのぼる秋のゆふぐれ
明けばまた越ゆべき山の嶺なれや空ゆく月の末の白雲
武藏野は月の入るべき山もなし尾花がするにかゝる白雲

藤原家隆
賀茂眞淵
惠慶法師
讀人知らず
惠慶法師
讀人知らず
源 俊頼
素性法師
良運法師
大江千里
藤原顯輔
寂蓮法師
藤原家隆
源 通方

(一)信濃國筑摩郡
洗馬附近の廣
原。武田信玄
と小笠原長時
の古戰場。

くいる
しほりぞめに
する。
流れもあへぬ
つかへて流れ
ぬ。

ものゝふの草むすかばね年ふりて秋風さむし桔梗が原
奥山にもちみ踏みわけなく鹿のこゑ聞く時ぞ秋はかなしき
下紅葉かつ散る山の夕時雨ぬれてやひとり鹿のなくらん
山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿のなく音に目をさましつゝ
ちはやふる神代もきかず龍田川からくれなるに水くゝるとは
山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり
篋士よ待てこととはん水上はいかばかり吹く山のあらしぞ
吹くからに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらん
朝まだき嵐の山のさむければ紅葉のにしき着ぬ人ぞなき
信濃なるすがの荒野をどぶ鷺のつばさもたわにふく嵐かな
暮るゝより松に吹立つわが山のあらしの末を誰か聞くらん
荒熊はゆくへもしらす杉山のうつばに籠るこがらしの風
みよし野の山の秋風さ夜ふけてふるさと寒く衣うつなり
み山には霞ふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり

加藤宇萬伎
猿丸大夫
藤原家隆
壬生忠岑
在原業平
春道列樹
藤原資宗
文屋康秀
藤原公任
賀茂眞淵
香川景樹
加納諸平
藤原雅經
讀人しらす

煙をだに
煙だけでもた
やすまいと。

雲ゐに吹きて
中空に吹い
て。
心もしぬに
て。心がしをれ

末の露
草の葉末の
露。
草の根本のし
づく。

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草も枯れぬと思へば
 源 宗子
 淋しさに煙をだにもたえじとて柴折りくぶる冬の山里
 和泉式部
 木の葉ちる宿は聞きわくことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も
 源 頼實
 み吉野の山かき曇り雪ふればふもとの里はうちしぐれつゝ
 俊惠法師
 淡路島かよふ千鳥の鳴くころにいく夜寝ざめぬ須磨の關守
 源 兼昌
 夕されば海上がたの沖つ風雲ゐに吹きて千鳥なくなり
 賀茂真淵
 近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへおもほゆ
 柿本人麿
 昨日といひ今日と暮して飛鳥川ながれて早き月日なりけり
 春道列樹
 世の中は何か常なるあすか川きのふの淵ぞ今日は瀬となる
 讀人しらす
 明日知らぬ我が身と思へどくれぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ
 親鸞上人
 有るは無く無きは數そふ世の中にあはれいづれの日まで歎かん
 小野小町
 明日ありと思ふ心のあだ櫻夜半にあらしの吹かぬものは
 讀人しらす
 形見こそ今はあだなれこれなくば忘るゝ時もあらましもものを
 讀人しらす
 末の露もこの雫や世の中のおくれ先だつためしなるらん
 僧正遍昭

(一)攝津國東成郡。

わたの原漕出でて見ればひさかたの雲ゐにまがふ沖つ白浪
 藤原忠通
 奈吳(なご)の海の霞の間よりながむれば入日をあらふ沖つ白浪
 後徳大寺實定
 箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄るみゆ
 源 實朝
 夜もすがら富士の高嶺に雲きえて清見が關にすめる月影
 藤原顯輔
 天の原てる日のちかき富士の嶺に今も神代の雪はのこれり
 加藤枝直
 心あてに見し白雲は麓にて思はぬ空に晴るゝ富士の嶺
 村田春海
 われ見ても久しくなりぬ住吉(すまぎ)の岸のひめ松いく世へぬらん
 讀人しらす
 草も木もわが大君の國なればいづくか鬼のすみかなるべき
 紀 友雄
 千歳までかぎれる松も今日よりは君にひかれて萬代や經ん
 大中臣能宣
 君が代の久しかるべきためしにや神も植ゑけん住吉の松
 讀人しらす
 筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみ蔭にます蔭はなし
 讀人しらす
 住吉の松を秋風吹くからにこゑうち添ふる沖つ白浪
 凡河内躬恒
 橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常磐(とこひば)の木
 聖武天皇
 海ゆかば水づく屍山ゆかば草むす屍大君の邊にこそ死なめ願はせじ
 讀人不知

朴	概	槁	楫	棕	基	案	柿
樸	槩	槁	楫	椶	基	椀	柿
睹	狸	貉	無	烟	温	汙	毗
視	狸	貉	无	煙	溫	汚	毗
紕	紕	紕	紕	紕	紕	紕	紕
花	艚	船	羈	羈	羈	羈	羈
華	櫓	船	羈	羈	羈	羈	羈
踪	谿	諱	訛	衽	虱	逋	踰
蹤	溪	諱	譌	衽	虱	遁	踰
駟	雞	雁	陰	鏹	鉞	遁	踰
驅	鷄	鴈	陰	鏹	鉞	遁	踰

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中*標ヲ附シタル文字ニ限り、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

* 體 体
* 巨 互

ワタル。「連互」
根ニ同シ。
笨ニ同シ。アラン、麗、粗。
カラダ。

* 絲 糸
* 欠 欠
* 鎗 槍
* 改 改
* 擔 担
* 託 托
* 姬 姬
* 壺 壺

ツボ。
ミチ、宮中ノミチ。
ツ、シム。
ヒメ。
拓ニ同シ。オス、ヒラク。
ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。
ハラフ。又アゲ。
ニナフ、カツク。
鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
アラタム。
ヤリ。
鏹ニ同シ。鏹ノ聲ノ形容。
アケビ。「欠伸」
カク。「缺席」
ホソイト、細絲。
イト。

* 商 商
* 后 後
* 臺 台
* 刺 刺
* 協 協
* 胃 胃
* 僭 僭
* 但 但

タロシ、タロ。「但馬」
ツタナシ、拙劣。
ミダリガハシ、猥。
身分ヲ越エテオゴル。「僭越」
カブト、兜。「甲冑」
ヨツギ、嫡子。又子孫。「胃裔」
カナフ、叶。
オビヤカス、脅。
サス。「刺殺。刺客。名刺」
モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」
星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
ウテナ、ダイ。
ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
キミ。「皇后」
アキナヒ。
モト、本。

* 撰 選
* 迄 迄
* 豊 豊
* 証 證
* 詔 詔
* 詔 詔
* 蟲 虫
* 羨 羨

支那ノ地名。
ウラヤム。
魚介類ノ總稱。又ママシ。
シム。
ワビ、ワブ。「詔狀」
訛ニ同シ。アザムク。
ヘツラフ。
ウタガフ、疑。
アカシ、シルシ。「證明」
イサム、諫。
禮ノ古字。
ユタカ。
マデ。
ユク、行。
エラフ。(ヨリトル)
エラフ。(書物ヲ編纂ス)

卻シヨク 却シヨク 却シヨク 却シヨク
ヒマ、瞳。
シリゾク。「退却」
キダノ、「鍛錬」
シヨロ、鋳。

宛 字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おぼつかなし 覺束なし
 かカひヒ (詮の意の場合) 甲斐
 きつと 屹度
 さすが 流石、遠
 しまふ 仕舞ふ
 だけ 丈
 だめ 駄目
 ちやうど 丁度
 ちよつと 一寸、鳥渡
 でたらめ 出鱈目

とうく 到頭
 とかく 兎角、左右
 とて、とても 迎
 とにかく 兎に角
 なかく 中々、却々
 ふるまひ 振舞
 はかなし 果敢なし
 ほんたう 本當
 むだ 無駄
 むづかし 六ケし
 やたら 矢鱈
 やはり 矢張

附 録 終

大正六年十一月五日
 大正七年二月八日
 大正七年五月二日
 大正七年十月一日
 大正七年十二月十三日

大正六年十一月五日
 大正七年二月八日
 大正七年五月二日
 大正七年十月一日
 大正七年十二月十三日

改訂帝國讀本

價 定	卷一、二各金參拾八錢
至自	卷三、四各金參拾六錢
至自	卷十五各金參拾錢

著 者 芳 賀 矢 一

東京市神田區裏神保町九番地

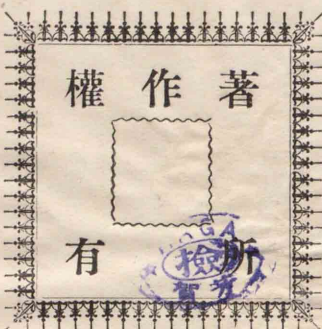
發行 者 兼 合資 會社 富 山 房

合資會社富山房社長

代 表 者 坂 本 嘉 治 馬

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

印 刷 所 合資 會社 電 新 堂



發 行 所

東京市神田區裏神保町九番地

合資 會社 富 山 房

長電話本局一〇三六・本局四一三〇番
 振替 口座東京〇五一番

